

千葉県八千代市

西内野遺跡発掘調査報告書

－物流センター建設に伴う埋蔵文化財調査－



2007

新京成電鉄株式会社
八千代市遺跡調査会

序 文

八千代市は、「住宅団地発祥の地」として知られておりまして、昭和30年代における八千代台の町づくりを契機として住宅団地の造成が進み、首都30km圏に位置する住宅都市として成長を続けてまいりました。

昭和60年代以降、市域北部における大学と住宅地のセット開発が行われ、文教都市としての側面も併せ持つようになっていきます。

また、京成電鉄に加えて平成8年4月には東葉高速鉄道が開業したことで、都心へのアクセスもさらに便利となりました。そして、沿線を中心とした新しいまちづくりが進み、ことに緑ヶ丘駅周辺は、今や八千代市の顔であると申し上げましても、過言ではありません。

このように、わが市は県内の中堅都市として、現在も発展し続けております。

このような状況のもと、八千代市遺跡調査会では、市内で行われる個人や民間企業の開発行為、土地区画整理事業などに先行する埋蔵文化財発掘調査に従事してまいりました。

本報告書に掲載した調査は、市域の西部に当たる、吉橋地区において計画された、物流センター建設に先立つものです。この事業地につきましては、平成10年度に埋蔵文化財についての照会があり、八千代市遺跡調査会が本調査を実施してまいりました。

八千代市西部は、縄文時代の遺跡が濃密に分布しているエリアで、東葉高速鉄道の敷設に先立つ調査におきましては、かなりの成果が上がっております。

西内野遺跡は、縄文時代の陥穴を主とした遺構群が検出され、当地域を代表する遺跡の一つであることが判明いたしました。特に縄文時代の狩猟場の解明や、出土例の希少な台付土器の持つ意味など、八千代市域における縄文時代の遺跡のあり方、あるいはその歴史的な背景を語るためには、欠くことのできない基礎資料を得ることができました。

本報告書が学術資料としてはもとより、教育資料として、郷土の歴史に興味をお持ちの皆様が大いに活用されれば幸いです。また、このことにより、地域の文化財保護についての関心を高めることとなりますことを願ってやみません。

最後になりましたが、調査の実施にあたり多大なご協力をいただいた事業者の皆様を初め、調査から整理までに種々ご指導をいただいた皆様に深く感謝いたします。

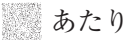


また、調査や整理に従事された調査員、補助員の方々にも深く御礼申し上げます。

平成19年10月15日

八千代市遺跡調査会

会長 加賀谷 孝

凡 例

1. 本書は、千葉県八千代市吉橋に所在するに西内野遺跡の、平成10年度及び平成11年度に実施された発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、地権者である新京成電鉄株式会社の委託を受け、八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。
3. 調査及び整理は以下のように実施した。
調査期間 平成11年2月5日～平成11年2月25日（確認調査）
平成11年4月6日～平成11年5月6日（本調査）
整理期間 平成19年8月20日～平成19年11月15日（本整理）
4. 現地調査は、蕨 茂美が担当し、本整理については中野修秀が担当した。
5. 本書の図版作成は、中野修秀、野中則子、見神光恵、山下千代子が行った。出土遺物の写真撮影に関しては、高屋麻里子が行い、編集・執筆は中野が担当した。ただし、第1章第1節は森 竜哉が執筆した。
6. 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
7. 挿図の第1図の地形図は、八千代市発行の25,000分の1八千代市都市計画基本図を使用した。
8. 挿図の第2図の地形図は、八千代市発行の2,500分の1八千代市都市計画基本図を使用した。
9. 遺構Noは、調査順の数字で表記した。遺構の内容や時期が異なる場合も、調査時点のNoを使用して
いる。
10. 各実測図の縮尺については、原則として下記のとおりである。
陥穴及び土坑 1/40 溝平面図 1/80
11. 遺構遺物及び実測図中のスクリーントーンは、特に指摘が無い場合は、以下のとおりである。
 あたり  繊維土器・磨れ面  敲打痕
12. 阿玉台式土器に関してのみ、胎土に雲母を含む「雲母混入型」は断面にドットを付した。
13. 遺構の考古学用語は、調査時点では「土壙」になっているが、報告にあたり、「土坑」に改称した。
本書の立場としては、明らかに墓壙と認定し得るものに関しては、「土壙墓」ないしは「土壙」と呼ぶことにし、それ以外は「土坑」と呼称することにしたい。
「おとしあな」は、「陥穴」と表記することにし、「落とし穴」の用語は用いなかった。
14. 出土遺物の実測図及び拓影図に関しては、深谷 昇氏により作図済の資料は、基本的にそれを使用し、追加資料及び修正が必要なものに限り、当方で作成した。ただし、出土遺物観察表は当方で新たに作成し、その内容に基づき、遺物の記述を行った。それは、土器の位置づけなどで見解の相違が生じたためである。当然ながら、それによって生じる不備な点を含めた、全ての問題の責任は、報告者にあることを明記しておく。
15. 発掘調査から整理作業の間において、以下の諸氏・諸機関にご指導・ご協力をいただきました。記
して感謝いたします。
植田正子 長田京子 千葉県教育庁文化財課 八千代市教育委員会

目 次

序文

凡例

目次

第1章	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	3
第4節 確認調査の出土遺物	7
第2章 検出された遺構と遺物	9
第1節 縄文時代	9
(1) 陥穴	9
(2) 土坑	15
(3) 調査区出土遺物	15
(4) 表採遺物	20
第2節 縄文時代以降	23
(1) 溝	23
第3章 成果と課題	24
第1節 縄文時代の陥穴	24
第2節 台付土器の評価	25
第3節 「台付の土器を作る」ということ	25
第4節 派生する問題	28
第5節 その他の縄文式土器	28

報告書抄録



遺跡近景（東側から）

第1章 調査経過及び概要

1. 調査にいたる経緯

平成10年12月16日、八千代市吉橋字西内野1824番1ほかの土地について新京成電鉄株式会社取締役社長竹内直之氏（以下、「事業者」という）から物流センター建設に伴い、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が八千代市教育委員会（以下、「市教委」と略）に提出された。照会地は市遺跡No.135西内野遺跡の範囲内であったが、現況は工場跡地及び山林であったため遺構・遺物は確認困難な旨千葉県教育委員会（以下、「県教委」と略）に副申した。県教委、市教委の現地踏査により試掘による判断が望ましいとの合意を得、試掘を実施したところ縄文時代の遺構・遺物が検出された。今回の照会面積28,060.86㎡の内、以前にその一部について照会があり試掘を実施して遺構・遺物が検出されなかった部分と今回の試掘により除外した残余の5,400㎡について遺跡が所在する旨、県教委の回答を事業者に伝達した。その後、取扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初の計画を進めたい旨を確認し、発掘調査を予定することとなった。平成11年1月、文化財保護法第57条の2第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出され確認調査に着手した。

確認調査は、市教委が平成10年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫・県費補助金を受けて実施した。その結果、縄文時代竪穴住居跡2軒、竪穴遺構1基、土坑・陥穴10基、時期不明溝1条を検出した。この結果を踏まえ、県教委の指導のもと、219㎡について本調査が必要な旨事業者に伝達した。

その後、事業者と市教委との協議により、工事による掘削が本調査範囲に及ぶため現状保存は困難と判断されたため、記録保存の措置として本調査を実施することとなった。調査は市教委の指導により八千代市遺跡調査会が行うこととなり、調査会と事業者による委託契約が締結された。諸準備が整った平成11年4月、調査に着手した。

2. 調査の方法と経過

調査は、確認調査において遺構を検出した部分を拡張する形で行った。

これらの各調査区に対して、A地区～L地区と呼称した。これ以後の調査区一括遺物の取り上げも、この呼称を用いている。

まず、バックホーを用いて表土除去を行った。遺構確認面は、明瞭かつ確実な遺物包含層が存在しないため、原則としてソフトローム上面である。

表土除去後に人力による遺構確認作業を行った。この後全ての遺構の精査及び掘り下げは、人力で行ったものである。

遺物の取り上げは、トータル・ステーションによる。

遺構の土層断面図・エレベーション図及び平面図は、全て手実測にて執り行った。このうち、遺構平面図の作成に関しては、遺構の周囲に五寸釘と水糸を用いて、1m×1mのメッシュを張り巡らすという、「簡易遣り方」法を援用したものである。

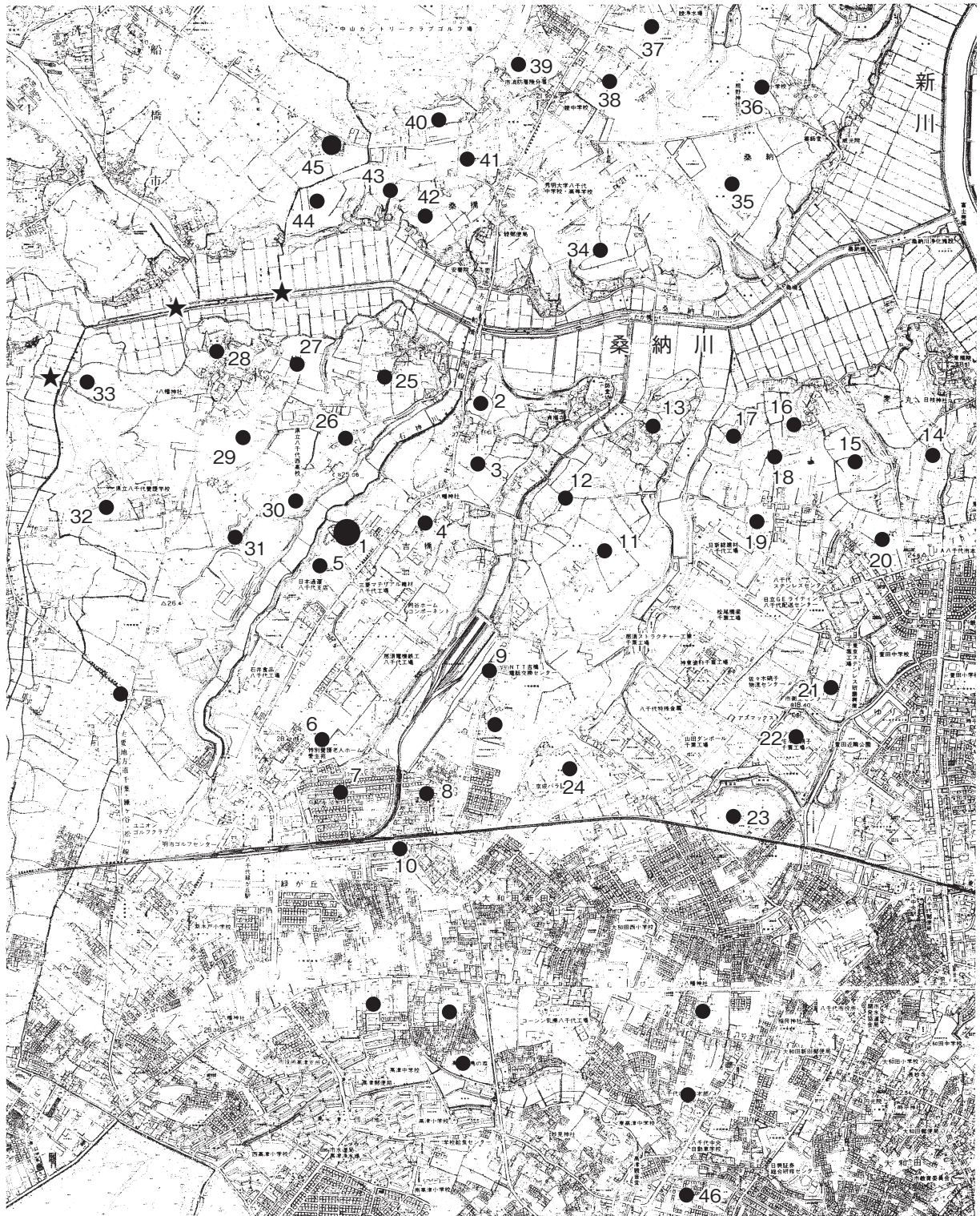
検出遺構などの写真撮影は、モノクロフィルム・カラー・リバーサルフィルムともに、ブローニー判(6cm×7cm)と35mmの両方を使用している。

平成11年3月30日より、バックホーによる表土除去を開始した。翌31日バックホー搬出。

同年4月6日より機材を搬入する。時同じくして調査補助員を投入し、遺構確認作業を着手する。

同年4月8日より遺構調査を開始する。この後、順次各調査区にて諸作業を行った。

同年4月30日に現地調査を終了し、機材などの搬出を完了する。



第1図 周辺の縄文時代の遺跡 (S=1:25000)

- | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|------------|
| 1 西内野遺跡 | 10 ライノ作南遺跡 | 19 麦丸台遺跡 | 28 大作遺跡 | 37 東掃久保遺跡 |
| 2 妙見前遺跡 | 11 吉橋芝山遺跡 | 20 米本道南遺跡 | 29 東向遺跡 | 38 実高入遺跡 |
| 3 洪内遺跡 | 12 平作遺跡 | 21 ラサル山遺跡 | 30 西芝山遺跡 | 39 鶴作台遺跡 |
| 4 八幡前遺跡 | 13 勘子山遺跡 | 22 ラサル山南遺跡 | 31 西芝山南遺跡 | 40 鶴作台西遺跡 |
| 5 西内野南遺跡 | 14 麦丸宮前遺跡 | 23 向山遺跡 | 32 八王子台遺跡 | 41 追分遺跡 |
| 6 内野南遺跡 | 15 水神遺跡 | 24 長兵衛野南遺跡 | 33 川向遺跡 | 42 本郷台遺跡 |
| 7 仲ノ台遺跡 | 16 新田遺跡 | 25 吉野郡幾遺跡 | 34 大東台遺跡 | 43 サゴテ遺跡 |
| 8 ライノ作遺跡 | 17 新田西遺跡 | 26 吉橋新山遺跡 | 35 桑納遺跡 | 44 爪作遺跡 |
| 9 大和田新田芝山遺跡 | 18 新田台遺跡 | 27 背戸遺跡 | 36 桑納前畑遺跡 | 45 金堀台貝塚遺跡 |
| | ※★は桑納川低地遺跡群 | | | 46 高津新山遺跡 |

3. 周辺の地理的・歴史的環境

西内野遺跡は、巨視的に見れば新川（平戸川）と桑納川の分水嶺に相当する、標高約26m前後の台地（仮称 麦丸台）に位置する。

この麦丸台は、開析谷が発達しており、桑納川谷へ向かう形で幾つかの舌状台地（支台）が形成されている。その内の、先端に吉橋城跡をのせる支台（仮称 吉橋支台）の中程、支谷に面した西側一帯に、本遺跡は遺されている。

第1図は麦丸台を中心とし、桑納川谷の対岸（仮称 島田台）の、縄文時代の遺跡分布である。

これらの遺跡の大半が複合遺跡で、遺跡台帳の資料の記載欄に「縄」と記載されたものを掲載した。そして、調査例のない場合は、単にドットを落とすのみで済ませた例もあるが、御寛恕を乞いたい。

まず、本遺跡をのせる吉橋支台であるが、吉橋城跡の外曲輪と推定される妙見前遺跡で、縄文前期前半黒浜式から、中期阿玉台式・加曽利E式、後期安行式などが確認されている。渋内遺跡もまた、吉橋城跡に関連する集落と思われるが、縄文式土器が出土した。八幡前遺跡は、縄文後期中葉加曽利B式・後期安行式、西内野南遺跡は、後期中葉加曽利B式と遺跡地名表に記載されている。

支台の基部付近の内野南遺跡では、縄文早期中葉三戸式期の土坑群や、早期後半茅山上層式期の炉穴群などが検出された（常松1998）。ここから、花輪谷津（花輪川谷）を挟んで東に隣接する支台（仮称 尾崎支台）では調査例が多い。

尾崎支台では、東葉高速鉄道敷設に先立つ調査などで、多くの事実が判明した。

ライノ作遺跡・ライノ作南遺跡・仲ノ台遺跡・大和田新田芝山遺跡では、縄文前期前半黒浜式期の集落が検出され、遺跡群から見た、当該期の人口動態の推移が分かってきた。ライノ作南遺跡の報文では、玉井庸弘氏による黒浜式土器の編年試案が公表された（玉井2000）。そして、仲ノ台遺跡をのせる台地自体が、半島状の小支台をなしている（仮称 仲ノ台小支台）。

支台の中央部から先端にかけては、吉橋芝山遺跡・平作遺跡・勘子山遺跡が分布し、縄文中期後半加曽利E式から後期中葉加曽利B式と遺跡地名表に記載されている。

さらに支谷を挟み、東に支台（仮称 麦丸新田支台）が隣接する。この支台は半島状の大きな支台で、幾つもの小支谷が開析し、小支台を形成している。

須久茂谷津（支谷）に面した東側は、萱田遺跡群の一部を構成しており、ヲサル山遺跡では、早期後半の炉穴群・中期前半阿玉台式期の集落及び後期中葉加曽利B式期の集落が検出された。小支谷を挟んで南側に隣接するヲサル山南遺跡では、数次の調査により、早期中葉沈線文土器・中期前半阿玉台式期の集落などが検出されている。

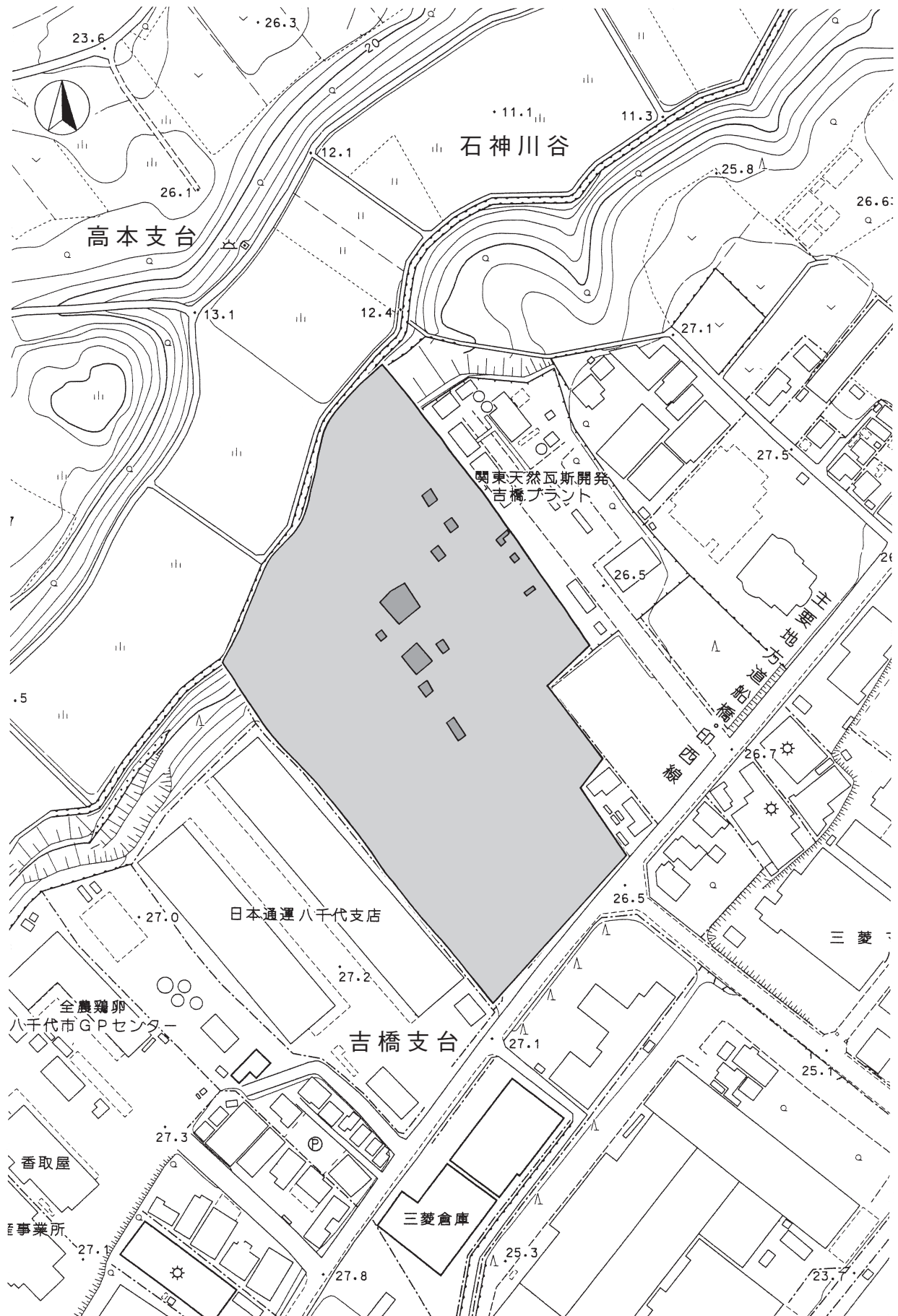
この南側は半島状の小支台をなし（仮称 向山小支台）、向山遺跡が調査されており、前期黒浜式・中期初頭・中期前半阿玉台式・後期土器などが出土した。

基部付近では長兵衛野南遺跡が調査されており、縄文中期終末の加曽利EⅢ式期後半の小規模集落が検出された（森1998）。

前後したが、吉橋支台の西側に開析谷（仮称 石神川谷）を挟んで、隣接するのが仮称寺台支台で、小支谷を挟み、その西側には仮称高本支台が開析されている。

この支台の西側の船橋市側では分水嶺となっており、桑納川が分岐し、桑納川谷も二つの谷筋（仮称 木戸川谷・坪井川谷）に分かれるのである。近年、船橋市境付近の桑納川と坪井川の川底などで、縄文時代を主に平安時代にかけての低地遺跡が発見され（常松ほか2006）、本地域においても、低地部分までを生活エリアに取り込んだ形での、遺跡論を展開する必要性が生じてきた。

寺台支台では、縄文時代の遺跡が比較的濃密で、ほぼ支台の全域を覆うように分布しており、北か



第2図 調査範囲及び事業範囲 (S=1:2500)

ら吉橋那幾遺跡では後期中葉加曾利 B 式・後期安行式、吉橋新山遺跡では前期後半黒浜式・中期阿玉台式・加曾利 E 式・後期堀之内式・加曾利 B 式、西芝山遺跡では中期後半加曾利 E 式・後期堀之内式・加曾利 B 式と、地名表に記載されている。

高本支台も、縄文時代の遺跡分布が濃密である。北から背戸遺跡では前期黒浜式・前期末葉・中期阿玉台式・加曾利 E 式・後期堀之内式、大作遺跡では後期中葉加曾利 B 式、八王子台遺跡では後期安行式、西芝山南遺跡では後期と、地名表に記載されている。

島田台であるが、その北東端は新川と神崎川の分水嶺となり、「平戸半島」とも呼ばれている。挿図はそのごく一部で、支谷により二つの支台（仮称 桑納支台・桑橋支台）に分かれる。

桑納支台では、桑納前畑遺跡（睦小学校遺跡は本来同一集落）が調査されており、中期末葉の加曾利 E IV 式の小竪穴が検出され、同期の比較的まとまった土器群が出土している。

桑橋支台では、本郷台遺跡が調査されており、早期後半の炉穴群及び後期のピット群を検出し、後期前半堀之内 1 式土器のまとまった資料や、晩期末葉千網式土器などが出土した（伊藤2000）。その他、サゴテ遺跡・瓜作遺跡では中期・後期と、地名表に記載されている。

船橋市金堀台貝塚は、小支谷を挟んだごく近隣に所在する著名な貝塚遺跡で、晩期安行式期の竪穴住居跡や、後期中葉加曾利 B 式から晩期安行式にかけての土器・土偶などが出土した。

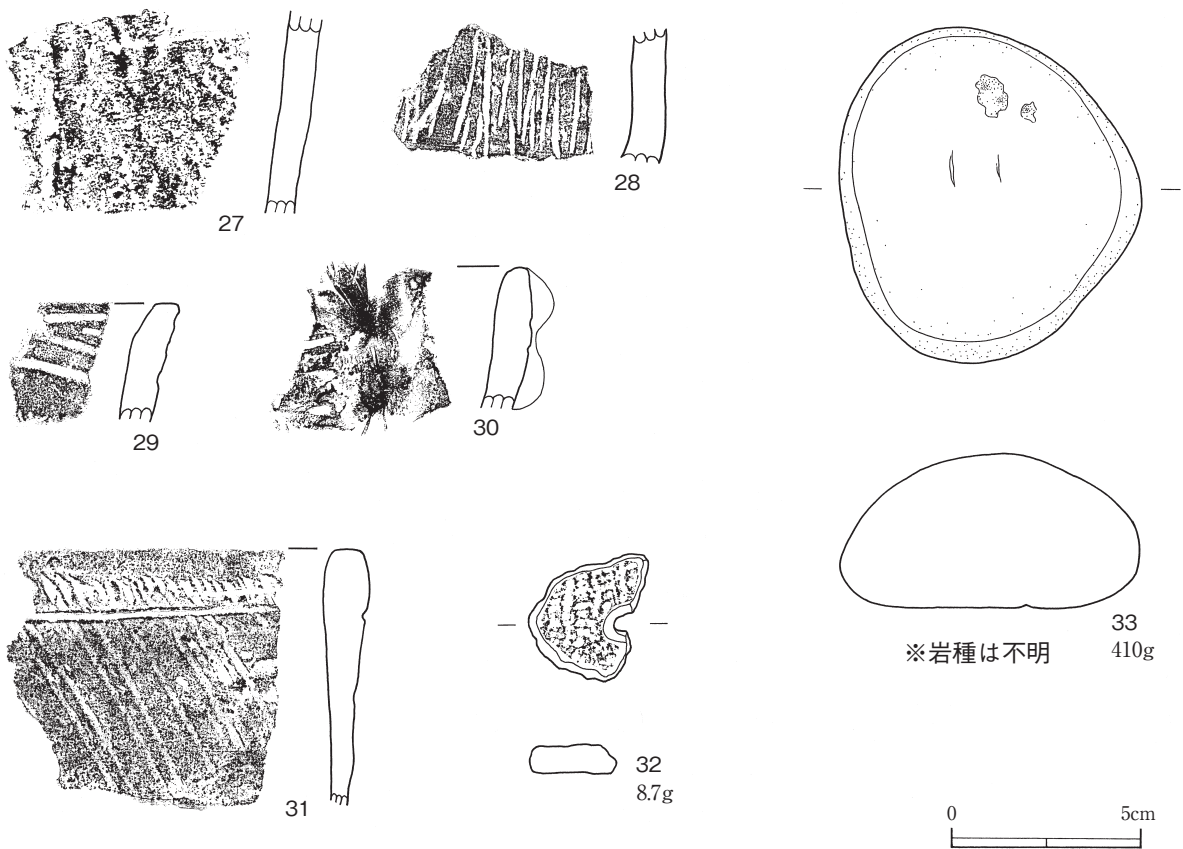
確認調査の結果については、平成10年度市内遺跡発掘調査報告書（蕨1999）を参照されたい。

参考文献

- 朝比奈竹男ほか 1982 『千葉県八千代市麦丸遺跡』 八千代市遺跡調査会
- 伊藤弘一 2000 「Ⅱ 本郷台遺跡」『千葉県八千代市高津館跡 b 地点・本郷台遺跡発掘調査報告書』 八千代市教育委員会 4-22頁
- 高橋 熙ほか 1975 「金堀台貝塚の再検討」『船橋考古』第4・5合併号 船橋市遺跡資料刊行会
- 玉井庸弘ほか 2000 『千葉県八千代市ライノ作南遺跡発掘調査報告書』 八千代市遺跡調査会
- 常松成人 1998 『内野南遺跡 a 地点発掘調査報告書』 八千代市遺跡調査会
- 常松成人ほか 2006 「特集 桑納川川底から発見された土器について」『資料館だより』第86号 船橋市郷土資料館
- 藤原 均ほか 1981 『千葉県八千代市睦小学校遺跡』 八千代市遺跡調査会
- 堀部昭夫ほか 1991 『八千代市の歴史 資料編原始・古代・中世』 八千代市史編さん委員会
- 溝口勝美ほか 1978 『千葉県八千代市桑納前畑遺跡』 睦小学校北方遺跡調査会
- 森 竜哉 1996 『仲ノ台遺跡・ライノ作遺跡他発掘調査報告書 - 西八千代東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査 -』 八千代市西八千代遺跡群調査会
- 森 竜哉 1998 『長兵衛野南遺跡発掘調査報告書』 八千代市遺跡調査会
- 森 竜哉 2001 「6. 麦丸遺跡 d 地点」『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』 八千代市教育委員会 19-21頁
- 森 竜哉 2001 「9. 向山遺跡 b 地点」『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』 八千代市教育委員会 27-28頁
- 八千代市教育委員会 1983 『八千代の遺跡 - 千葉県八千代市埋蔵文化財所在地調査報告書』
- 蕨 茂美 1999 「4. 西内野遺跡」『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度』 八千代市教育委員会 9-11頁



第3図 確認調査出土遺物（1）



第4図 確認調査出土遺物(2)

4. 確認調査の出土遺物(第3図・4図)

出土遺物は、本紙面で報告する。出土総数は黒浜3点、浮島・興津20点、前期末～中期中頭14点、五領ヶ台4点、阿玉台29点、加曽利E 5点、加曽利B 1点、安行6点、不明21点。石器1点、石2点。

1～3は前期前葉黒浜式土器。1は1段Rないしは、附加条縄文による地文縄文部分。2は地文縄文のみ施文し、原体は2段R Lか。3も地文縄文。輪積みのつなぎ部分で、下段の施文部と重なるように上段を積み、その後施文。本例は関山式土器になる可能性がある。

4～8は前期後半浮島・興津式土器。4は口縁下に斜位の条線帯、その下には波状貝殻文。5は貝殻復縁の圧痕により、横位の綾杉状の意匠を施す。6は横位の波状貝殻文を施文。7は不明瞭ながら、横位の変形爪形文を施すもの。8は斜位の沈線を引く。

9～13は前期末葉～中期中頭の縄文系粗製土器。9・11は横位の結節縄文を施文する。10は1段Lの地文のもので、12はかなり崩れた施文である。反撚りなども考慮する必要がある。

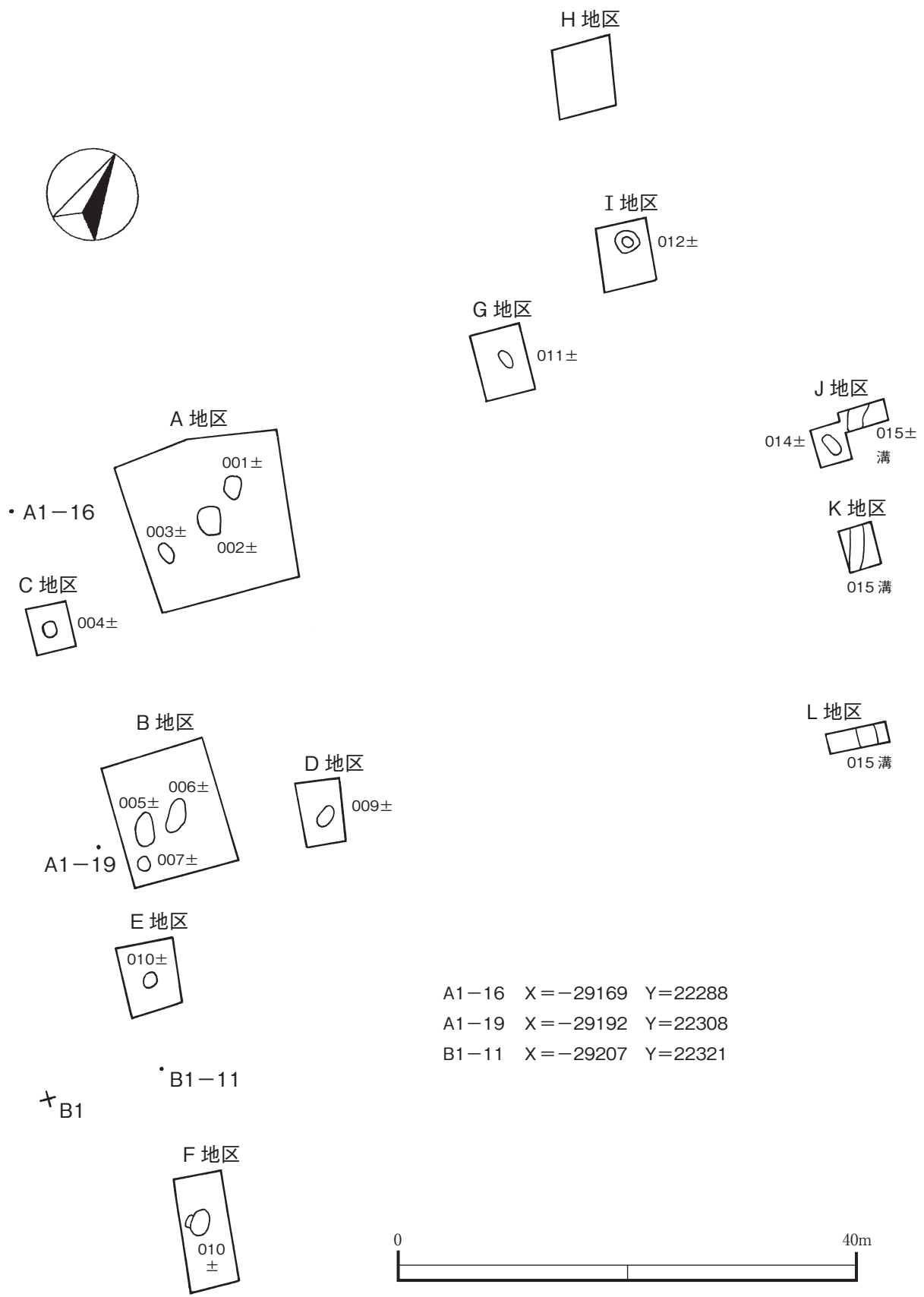
14～17は五領ヶ台式土器。14は外反し外肥厚した口縁部に、縦位の短沈線を充填する。15は隆線脇に沈線と角押文(結節沈線か)を施す。16は地文縄文。

18～28は阿玉台式土器。18は縦位の突起を起点に、区画文を構成。単列の角押文。19も口縁片。20～25は口辺ないし頸部片。23は複列の角押文。26・27は胴部片。28は条線を施文。加曽利E式か。

29は加曽利B式土器か。沈線による意匠を施す。

30・31は安行1式土器。30は隆起帯縄文(帯縄文)を施した精製土器。帯縄文は縦位の貼瘤を起点としている。31は紐線文系粗製土器。紐線は形骸化しており、右下がりの条線を地文に、口縁下に第一次区画文として横位沈線を引き、キザミ列を充填する。器形的には砲弾形に近い深鉢。

32は土器片素材の有孔円盤で、楕円形。33は磨石か。全体に滑らかで、顕著な使用面は見られない。



第5図 各調査区及び遺構配置図 (S=1:500)

第2章 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代

今回の調査で陥穴8基、土坑5基が検出された。本調査に際して、確認調査時のトレンチ拡張部分をA地区～L地区と呼称したため、以下の記載では、位置関係は各区で表記することとする。なお、H地区として調査したところの013遺構は、諸条件・諸属性を鑑みつつ検討の結果、「遺構」ではないという判断に至った。そのため、該当遺構は欠番扱いとする。

それから、「陥穴」に関しては、報告者が認定したもので、調査者側の記録には明確ではない。従って、以下の内容に不備及び事実誤認が生じた場合、一切の責任は報告者にあることを明記しておく。

(1) 陥穴（第6図～第8図）

001 土坑（第6図）

位置 A地区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも隅丸長方形を呈する。壁・底面 底面から中段までが垂直気味で、それより上はゆるやかに立ち上がる。底面はやや凹凸が有る。底部施設 検出されず。規模 上部で1.48m×1.23m、底部で0.96m×0.65m、検出面からの深さ0.87mを測る。覆土 6層に分層でき、上層は黒褐色土系、下層は暗褐色土系の土で埋まっている。全て自然堆積である。遺物 出土しなかった。

002土坑（第6図）

位置 A地区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部は不整楕円形、底部は隅丸長方形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は比較的平坦。底部施設 中央部に0.40m×0.30mのピット1基を穿つ。規模 上部で2.03m×1.72m、底部で0.92m×0.72m、検出面からの深さ1.03m（ピット底面まで1.28m）を測る。覆土 7層に分層でき、上層は黒褐色土系、下層は暗褐色土系の土で埋まっている。6層までは自然堆積で、7層は底部施設の覆土で、人為的に埋められている。遺物 縄文式土器2点（阿玉台式）が出土。

1は口縁部片。平縁で、ごく狭小な内稜を有する。粘土板二枚を折り曲げ、縦位に接続させて貼付した突起を付し、そこを起点に隆線で区画文を構成して、隆線脇に単列の押引文を沿わせている。胎土は「非雲母混入型」。阿玉台I a式。

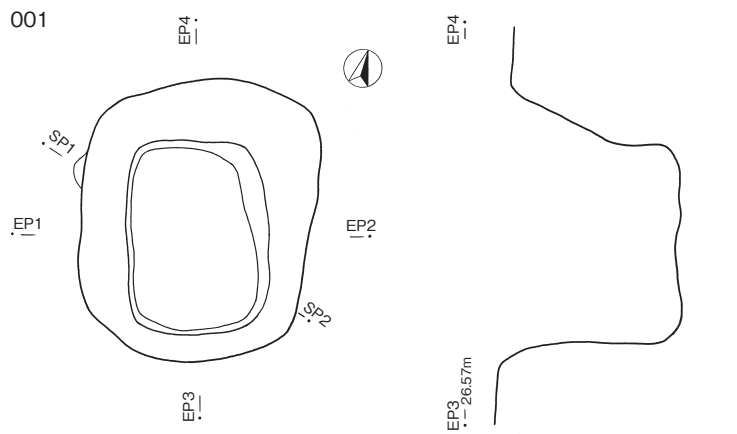
003土坑（第7図）

位置 A地区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部は不整な円形、底部はやや不整な隅丸長方形を呈する。壁・底面 底面から中段までが垂直気味で、それより上はゆるやかに立ち上がる。底面はやや凹凸が有る。底部施設 検出されず。規模 上部で1.25m×1.16m、底部で0.67m×0.59m、検出面からの深さ0.88mを測る。覆土 9層に分層でき、上層は黒褐色土系、下層は暗褐色土系の土で埋まっている。全て自然堆積である。遺物 旧石器1点が出土。

1は槍先形尖頭器。縦長剥片を素材に、表面は細かな押圧剥離を施して整形し、裏面は側縁のみに押圧剥離を施す。

004土坑（第7図）

位置 C地区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北－南。平面形 上部は略円形、底部は隅丸方形を呈する。壁・底面 底面から中段までがほぼ垂直で、それより上はゆるやかに立ち上がる。底面は比較的平坦であるが、底部施設の南側へ向かって極めてゆるやかな傾斜がつく。底部施設 中央部に0.24m×0.20mのピット1基を穿つ。規模 上部で1.25m×1.08m、底部で0.71m×0.67m、検出面からの深さ1.02m

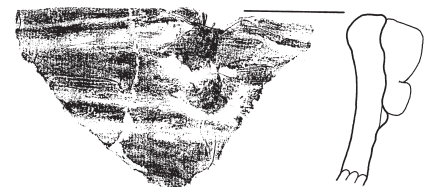
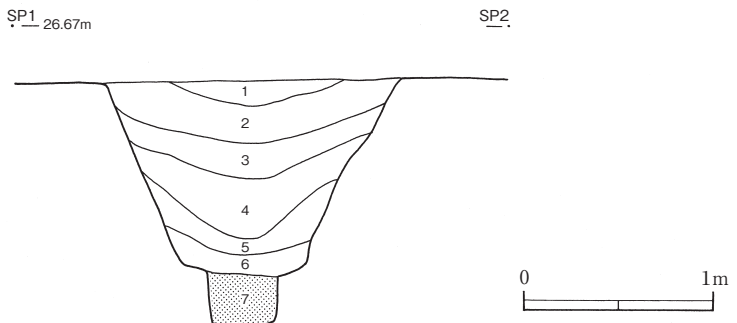
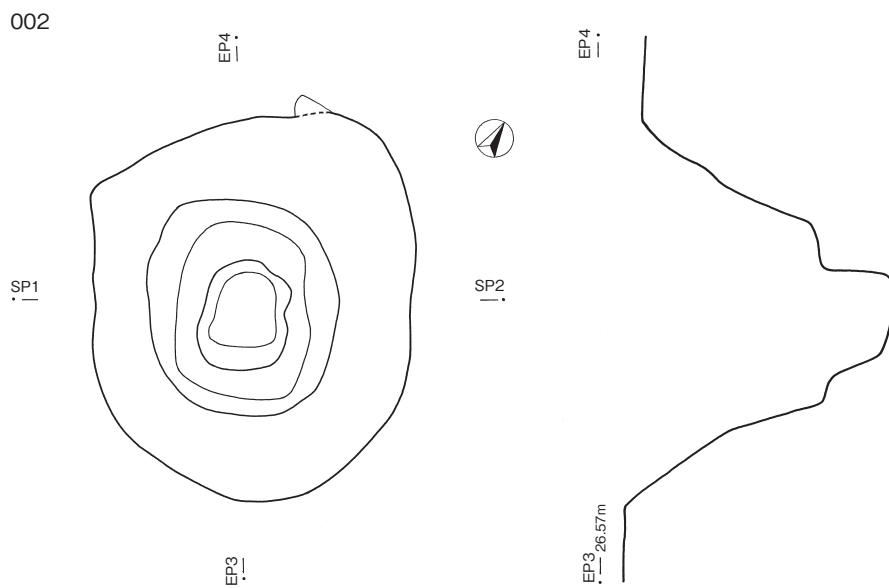
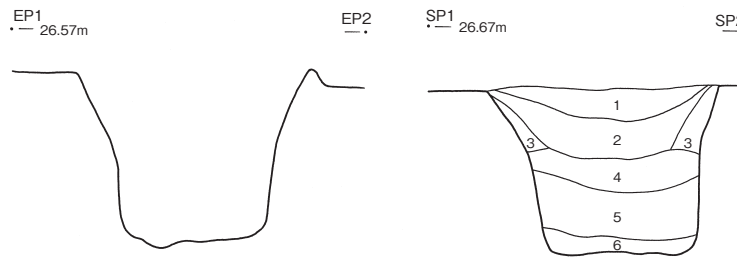


001上層説明

- 1 黒褐色土 黒色土と暗褐色土が均一にまじる。
- 2 黒色土 黒色土が主体の土。
- 3 暗黄褐色土 濁ったロームが主体の土。少量の暗褐色土を含む。
- 4 暗褐色土 暗褐色土と褐色土が均一にまじる。色調かなり明るい。
- 5 暗褐色土 暗褐色土が主体の土。
- 6 暗黄褐色土 濁ったロームが主体の土。暗褐色が少量まじる。

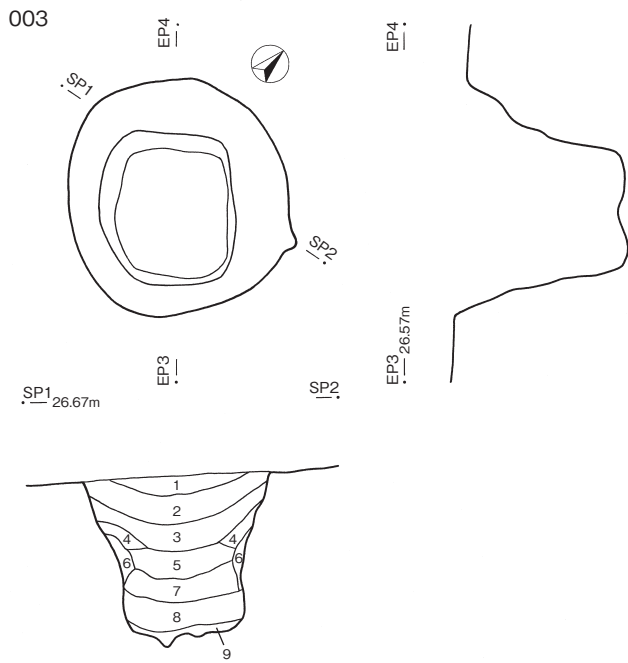
002土層説明

- 1 黒色土 黒色土と若干の暗褐色土が均一にまじる。
- 2 黒色土 黒色土主体の土。
- 3 黒色土 黒色土と若干の暗褐色土が均一にまじる。
- 4 黒色土 黒色土主体の土。
- 5 暗褐色土 暗褐色土と濁ったロームが均一にまじる。
- 6 暗黄色土 濁ったローム主体の土。若干の暗褐色土がまじる。
- 7 暗黄色土 濁ったローム主体の土。きめ細かい土。



002-1 (S=1/2)

第6図 陥穴実測図(1)

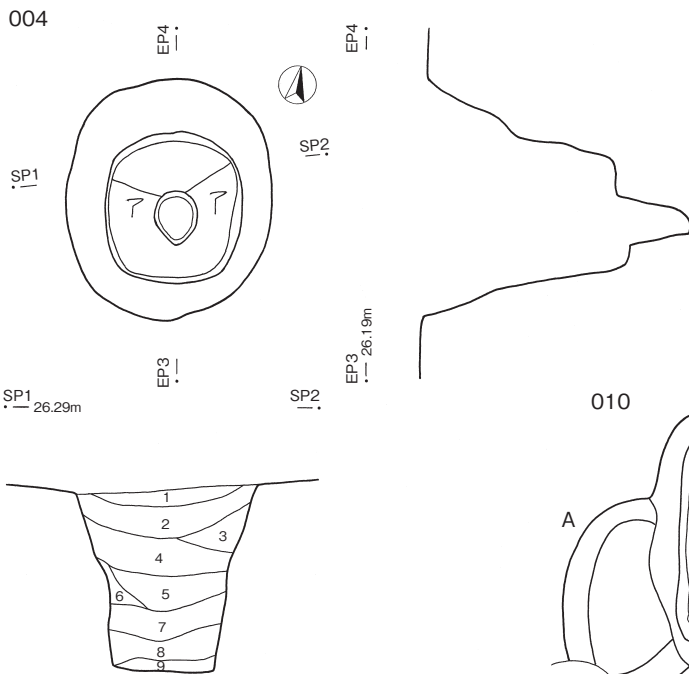


003土層説明

- 1 黒褐色土 黒色土と暗褐色土が均一にまじる。
- 2 黒色土 黒色土主体の土に若干の暗褐色土まじる。
- 3 黒褐色土 黒色土と暗褐色土が均一にまじる。
- 4 暗褐色土 暗褐色土と濁ったロームが均一にまじる。
- 5 暗褐色土 暗褐色土主体の土。
- 6 暗黄褐色土 濁ったローム主体の土。暗褐色土まじる。
- 7 暗褐色土 暗褐色土主体の土。
- 8 暗褐色土 暗褐色土主体の土。色調かなり暗い。
- 9 暗褐色土 暗褐色土と少量の濁ったロームがまじる。

004土層説明

- 1 黒褐色土 黒色土と少量の暗褐色土がまじる。
- 2 黒色土 黒色土中に若干の暗褐色土がまじる。
- 3 暗褐色土 暗褐色土と若干の濁ったロームがまじる。
- 4 黒色土 黒色土中に若干の暗褐色土がまじる。
- 5 暗褐色土 暗褐色土中に若干の濁ったロームが斑状にまじる。
- 6 暗褐色土 暗褐色土と少量の濁ったロームがまじる。
- 7 暗褐色土 暗褐色土が主体の土。若干の濁ったロームがまじる。
- 8 暗褐色土 暗褐色土と褐色土が均一にまじりあっている土に濁ったロームがまじる。
- 9 暗褐色土 暗褐色土主体の土。濁ったロームが若干まじる。

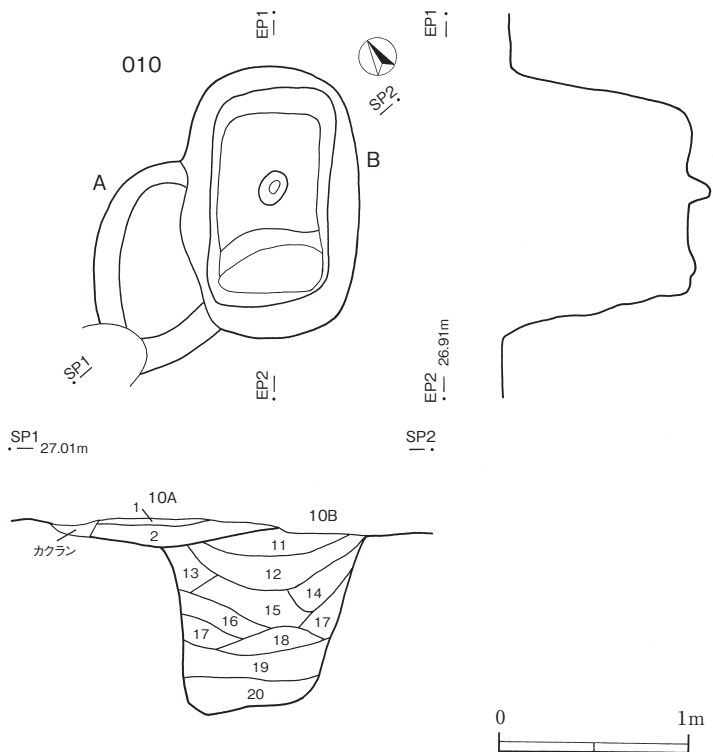
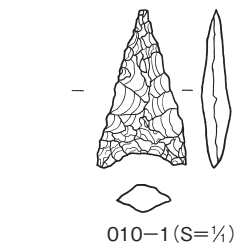


010A 土層説明

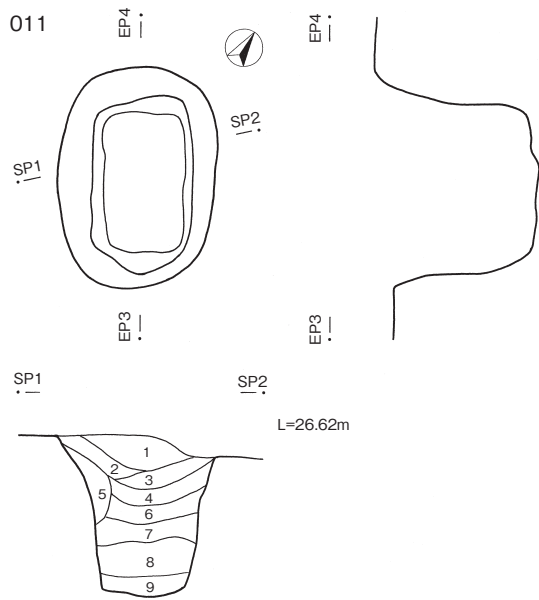
- 1 黒褐色土 黒色土と暗褐色土が均一にまじる。
- 2 黒色土 黒色土主体の土。暗褐色土若干含む。

010B 土層説明

- 11 黒色土 黒色土主体の土。
- 12 黒色土 黒色土中に若干の暗褐色土がまじる。
- 13 暗黄褐色土 濁ったロームと暗褐色土がまじる。
- 14 暗褐色土 暗褐色土中に若干の濁ったロームが均一にまじる。
- 15 暗褐色土 暗褐色土主体の土。濁ったローム含む。
- 16 暗褐色土 暗褐色土中に若干濁ったロームまじる。
- 17 暗黄褐色土 濁ったロームと暗褐色土がまじる。
- 18 暗褐色土 暗褐色土中に若干濁ったロームまじる。
- 19 暗黄褐色土 濁ったロームと暗褐色土がまじる。
- 20 暗褐色土 暗褐色土と若干の濁ったロームが均一にまじる。



第7図 陥穴実測図(2)

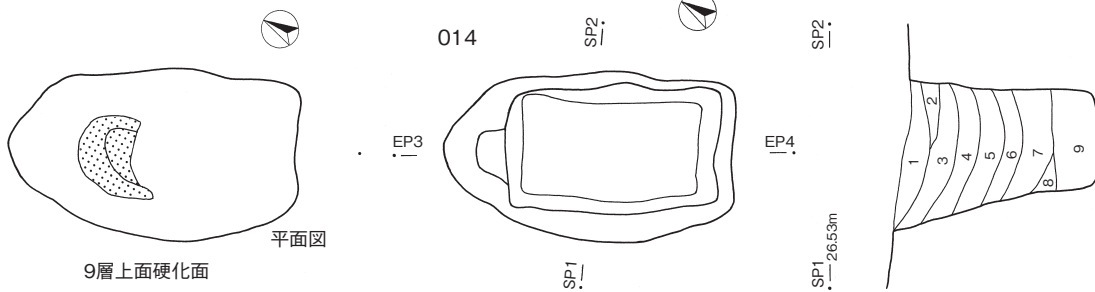
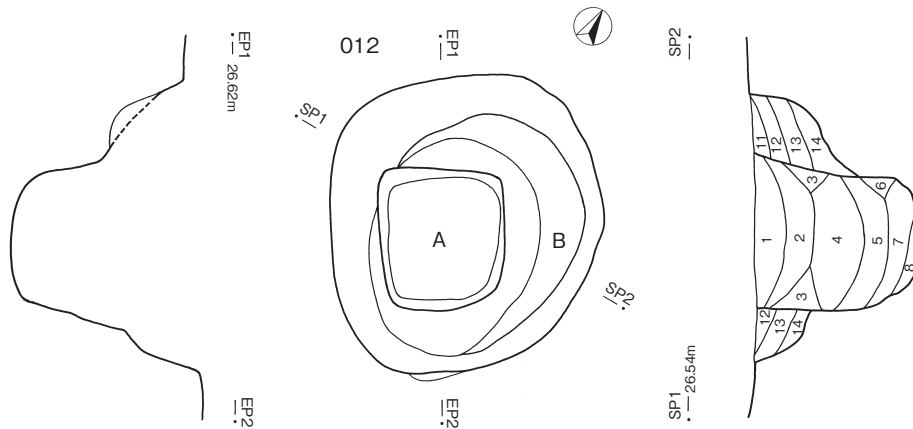


011土層説明

- 1 黒色土 黒色土主体の土。暗褐色土若干まじる。
- 2 黒黄色土 黒色土と濁ったローム少量がまじる。
- 3 黒色土 黒色土主体の土。暗褐色土がまじる。
- 4 黒褐色土 黒色土と暗褐色土がほぼ均一にまじる。
- 5 暗褐色土 濁ったロームが主体。暗褐色土が若干まじっている。
- 6 暗褐色土 暗褐色土と少量の褐色土がまじる。
- 7 暗褐色土 暗褐色土主体の土。部分的に若干ロームがまじる。
- 8 黒褐色土 黒褐色土と暗褐色土が均一にまじる。
- 9 暗褐色土 暗褐色土と若干の濁ったロームが均一にまじりあった土。

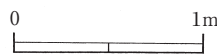
012土層説明

- 1 黒色土 黒色土主体の土。暗褐色土が若干にまじる。
- 2 黒色土 黒色土と若干の暗褐色土が均一にまじる。
- 3 暗褐色土 暗褐色土と若干の濁ったロームがまじる。
- 4 暗褐色土 暗褐色土主体の土。
- 5 暗褐色土 暗褐色土と少量の褐色土がまじる。
- 6 暗黄褐色土 濁ったロームと少量の暗褐色土がまじる。
- 7 暗褐色土 暗褐色土と少量の褐色土が均一にまじる。
- 8 暗黄色土 ローム主体の土。暗褐色土が若干まじる。
- 11 暗褐色土 暗褐色土と少量の濁ったロームまじる。
- 12 暗黄褐色土 濁ったロームと少量の暗褐色土まじる。
- 13 暗黄褐色土 濁ったロームと暗褐色土少量まじる。
- 14 暗黄褐色土 濁ったロームと若干の暗褐色土まじる。



014土層説明

- 1 暗褐色土 暗褐色土と褐色土が均一にまじる。
- 2 褐色土 褐色土と少量の暗褐色土がまじる。
- 3 暗褐色土 暗褐色土と少量の褐色土がまじる。
- 4 暗褐色土 暗褐色土主体の土。
- 5 黒褐色土 黒色土と暗褐色土少量が均一にまじる。
- 6 黒褐色土 黒色土と暗褐色土が均一にまじる。
- 7 暗褐色土 暗褐色土と若干の濁ったロームが均一にまじる。
- 8 黄色土 ローム主体の土。
- 9 黒色土 黒色土主体の土。若干の濁ったロームが部分的にまじる。



第8図 陥穴実測図(3)

(ピット底面まで1.40m)を測る。覆土 9層に分層でき、上層は黒褐色土系、下層は暗褐色土系の土で埋まっている。全て自然堆積である。底部施設の覆土であるが、野帳の観察記録によれば、濁ったロームが主体の土で、人為堆積の可能性が高い。遺物 出土しなかった。

010B 土坑 (第7図)

位置 B地区。重複関係 010A 土坑に破壊される。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部、底部とも隅丸長方形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は比較的平坦であるが、底部施設の南側にゆるい段差がある。底部施設 中央部に0.18m×0.13mのピット1基を穿つ。規模 上部で1.44m×0.95m, 底部で0.95m×0.55m, 検出面からの深さは0.98m(ピット底面まで1.08m)を測る。

覆土 10層に分層でき、上層は黒褐色土系、下層は暗褐色土系の土で埋まっている。全て自然堆積である。遺物 石器1点が出土した。

1は石鏃。ほぼ完存品で、小形の「無茎凹基式石鏃」。基部のノッチはやや深めで、直線的である。表裏面とも細かな押圧剥離を施し、ほぼ左右対称に整形されている。

011土坑 (第8図)

位置 G地区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも隅丸長方形を呈する。壁・底面 底面から中段までがほぼ垂直で、それより上はゆるやかに立ち上がる。底面は若干の凹凸を有する。底部施設 検出されず。規模 上部で1.17m×0.83m, 底部で0.75m×0.43m, 検出面からの深さ0.85mを測る。覆土 9層に分層でき、1~4層と8層は黒褐色土系、他は暗褐色土系の土で埋まっている。全て自然堆積である。遺物 出土しなかった。

012A 土坑 (第8図)

位置 I地区。重複関係 012B 土坑を破壊する。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも隅丸長方形を呈する。壁・底面 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央に向かってややくぼむものの、概ね平坦である。全体的にきっちりと掘られている。底部施設 検出されず。規模 上部で0.76m×0.66m, 底部で0.64m×0.57m, 検出面からの深さ0.87mを測る。覆土 8層に分層でき、上層は黒褐色土系、下層は暗褐色土系の土で埋まっている。全て自然堆積である。遺物 出土しなかった。

012B 土坑 (第8図)

位置 I地区。重複関係 012A 土坑の破壊を受ける。長軸 ほぼ北-南か。平面形 上部、底部ともやや不整気味の円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。底部施設 検出されず。規模 上部で1.55m×1.45m, 底部で1.15m×0.90m, 検出面からの深さ0.49mを測る。覆土 4層に分層でき、ほぼ暗褐色土系の土で埋まっている。全て自然堆積である。

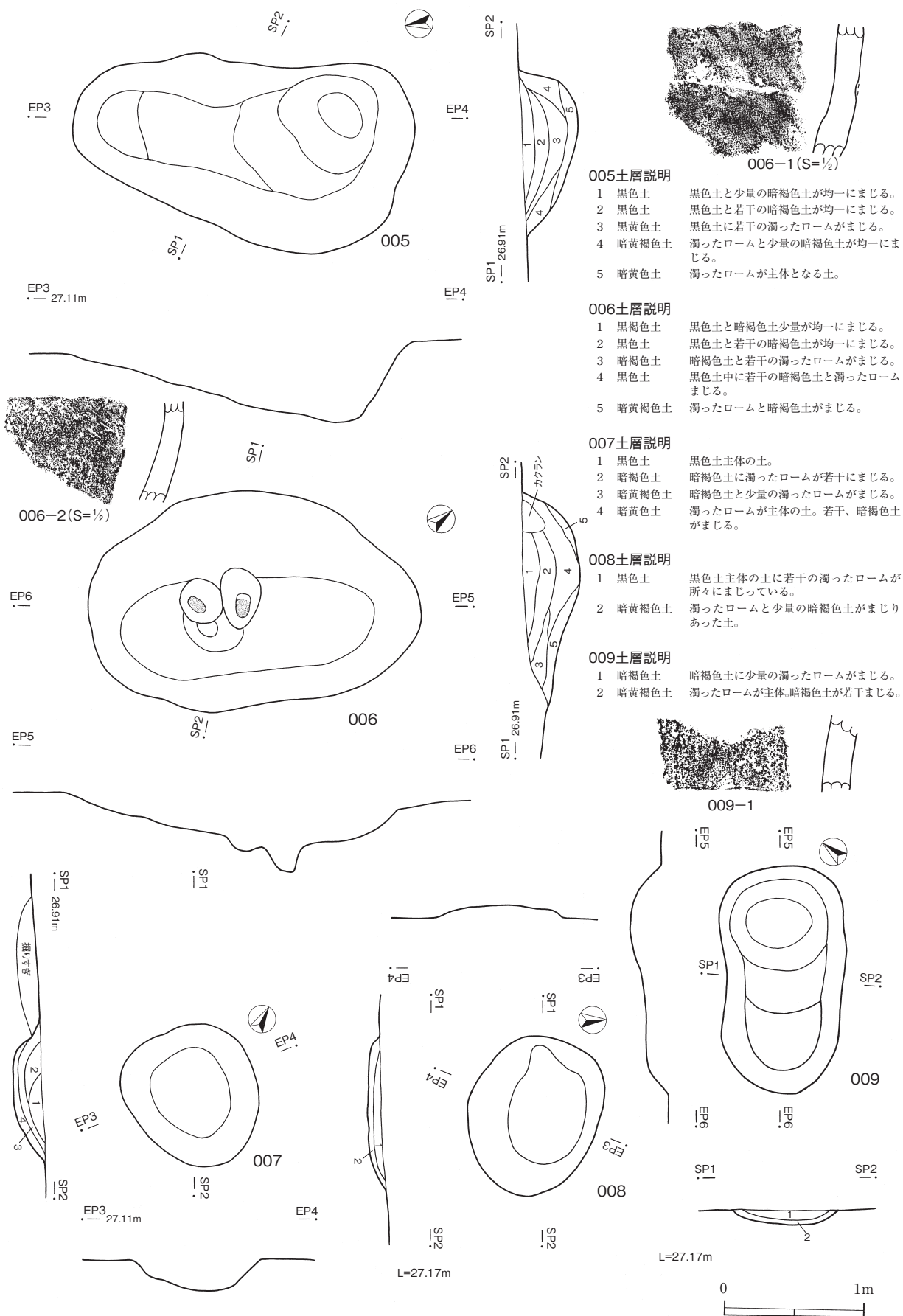
遺物 出土しなかった。

備考 本跡が完全に埋没後、012A が掘られている。本跡は陥穴からは逸脱するかも知れない。

014土坑 (第8図)

位置 J地区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも隅丸長方形を呈する。壁・底面 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央に向かってややくぼむものの、概ね平坦である。全体的にきっちりと掘られている。長辺側の北壁の中央上部に、壁の崩落した部分が認められる。底部施設 検出されず。規模 上部で1.54m×0.92m, 底部で0.94m×0.57m, 検出面からの深さ1.08mを測る。覆土 9層に分層でき、上層は黒褐色土系、下層は暗褐色土系の土で埋まっている。全て自然堆積である。先述の壁が崩落した部分の直下では、最下層の9層上面に、半月形の硬化部分が見られる。従って、9層(使用時の崩落など)と1~8層(使用後の埋没)では形成要因が異なると考えられる。

遺物 出土しなかった。



第9図 土坑実測図

(2) 土坑 (第7図・第9図)

005土坑 (第9図)

位置 B地区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部, 底部とも不整楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、その他はゆるやかに立ち上がる。底面は北側にテラスを有し、南側のピット部分に向かって傾斜する。規模 2.42m×1.40m, 検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 5層に分層でき、3層までが黒色土主体で、壁際及び最下層は暗褐色土系。全て自然堆積である。遺物 出土しなかった。備考 3層と4・5層では不整合面となる可能性がある。

006土坑 (第9図)

位置 B地区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部, 底部ともやや不整な長楕円形を呈する。壁・底面 北西側の壁はゆるやかに立ち上がり、その他の壁は垂直気味。底面は概ね平坦であるが、南へ向かってゆるやかに傾斜する。底面中央付近に小ピットを3本穿つ。1本は皿状で浅く、これを破壊する2本は底面に「あたり」状の硬化面を有する。規模 2.40m×0.42m, 検出面からの深さは0.42mを測る。覆土 5層に分層でき、黒褐色土が主体。全て自然堆積である。遺物 縄文式土器3点が出土。うち1点は底面直上の出土である。

007土坑 (第9図)

位置 C地区。重複関係 単独。長軸 円形なので、なし。平面形 上部, 底部とも略円形(卵形に近い)を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 1.03m×0.92m, 検出面からの深さは0.21mを測る。覆土 4層に分層でき、1層は黒色土であるが、他は暗褐色土主体。全て自然堆積である。遺物 出土しなかった。

008土坑 (第9図)

位置 E地区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部は楕円形, 底部は不整な楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は比較的平坦である。規模 1.14m×0.94m, 検出面からの深さは0.11mを測る。覆土 2層に分層できた。上層は黒色土で、下層は暗褐色土。全て自然堆積である。遺物 出土しなかった。

009土坑 (第9図)

位置 D地区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部, 底部とも長楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面にテラスを一段有し、北側のピット部分に向かって傾斜する。ピット部分は丸底となる。規模 1.63m×0.90m, 検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 2層に分層できた。暗褐色土を主体とする。全て自然堆積である。

遺物 縄文式土器1点が出土。1は胴部片で、調整痕のみ。前期後半浮島・興津式土器か。

010A土坑 (第7図)

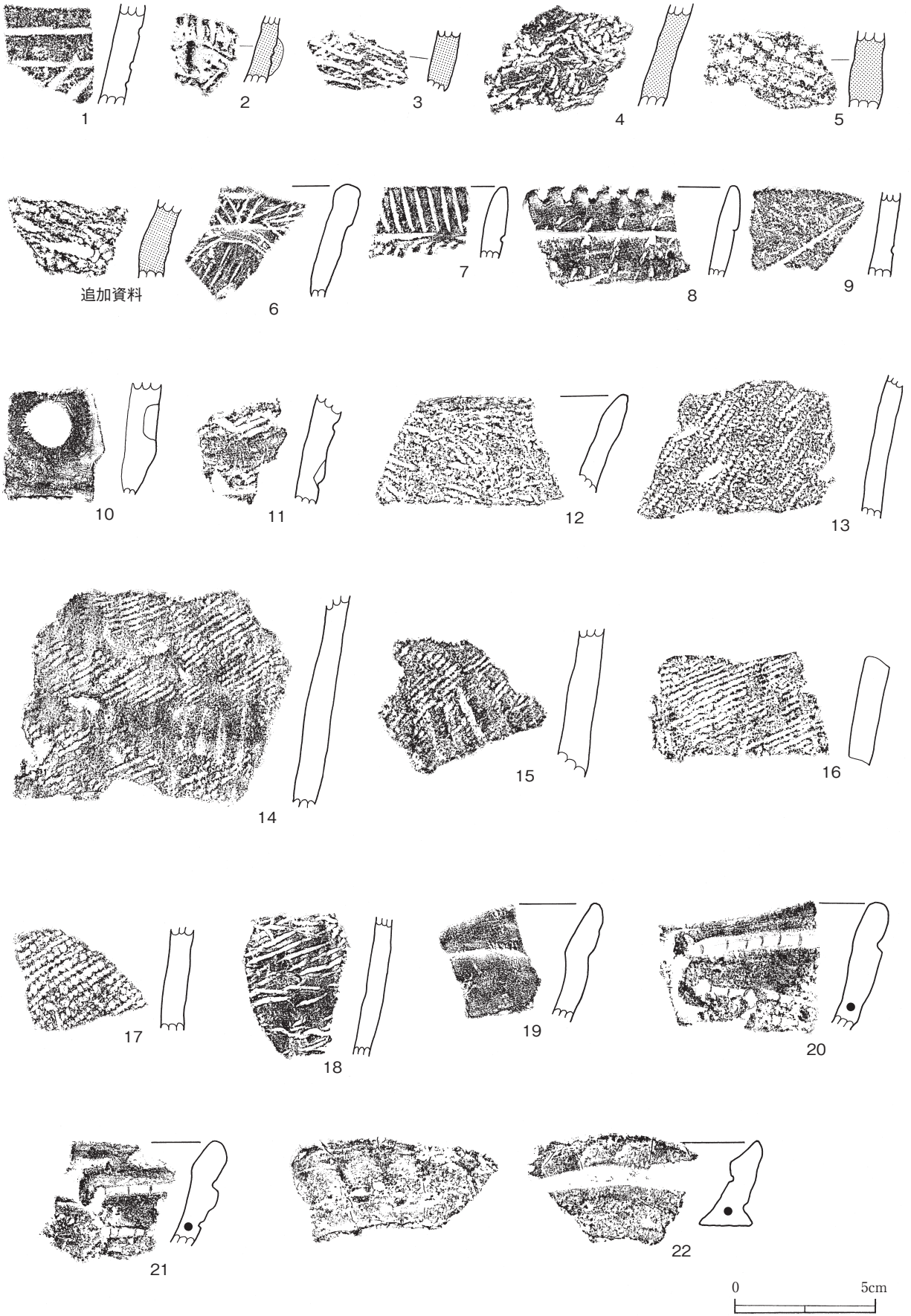
位置 B地区。重複関係 010B土坑を破壊する。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部, 底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は比較的平坦である。規模 (1.10m)×(0.78m), 検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 2層に分層できた。黒色土系を主体とする。全て自然堆積である。遺物 出土しなかった。備考 本跡は、紙数の都合上、第7図に掲載した。

(3) 調査区出土遺物 (第10図～第12図)

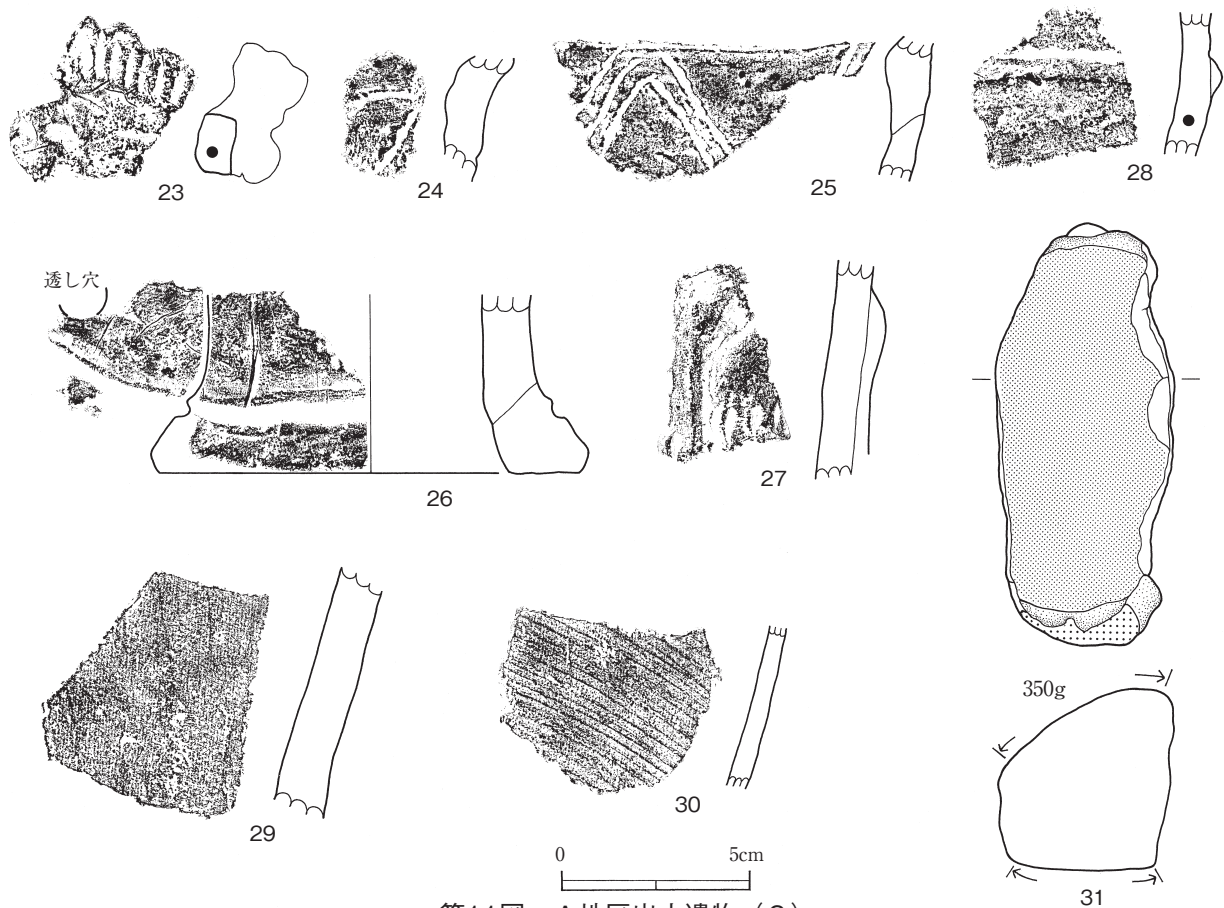
ここでは、調査区毎に記して行きたい。なおA地区は数量が多いため、他の区からは独立させた。

A地区 (第10図1～第11図31)

出土総数は沈線文1点, 黒浜式6点, 浮島・興津式10点, 前期末～中期初頭10点, 五領ヶ台式3点,



第10图 A地区出土遺物(1)



第11図 A地区出土遺物(2)

阿玉台35点, 勝坂式1点, 加曾利E式3点, 堀之内式1点, 安行式1点, 型式不明14点。

1は田戸下層式土器。太沈線で平行沈線と斜行沈線を引く。先後関係は平行→斜行である。

3～5・追加資料は、黒浜式土器。3～5は地文縄文の胴部片。3・4の使用原体は附加条縄文で、5は単節縄文、追加資料は無節縄文である。2は大木2a式土器か。は口辺の資料で、沈線による一次区画文内に、縦位の短沈線を充填し、その下に小振りで縦長の貼瘤を有する。

6～9は浮島・興津式。7は口縁下に斜位の条線帯を施すもので、8は口唇上にキザミ、複合口縁でごく浅い波状貝殻文を施文する。原体に使用した貝は、フネガイ科のものと思われる。

10は五領ヶ台式土器。ボタン状の突起を貼付し、中央に大振りな盲孔を穿つ。そのため、一見するとドーナツ状の観があるが、突起の貼付→盲孔を穿つ、というプロセスに間違いはない。

11～18は前期末葉～中期初頭の縄文系粗製土器。11は複合口縁で、口縁下端に彫刻状のキザミを施す。12は単口縁で、口唇部形態は、やや尖塔状を呈する。14～16は同一個体で、1段Lを施文する。

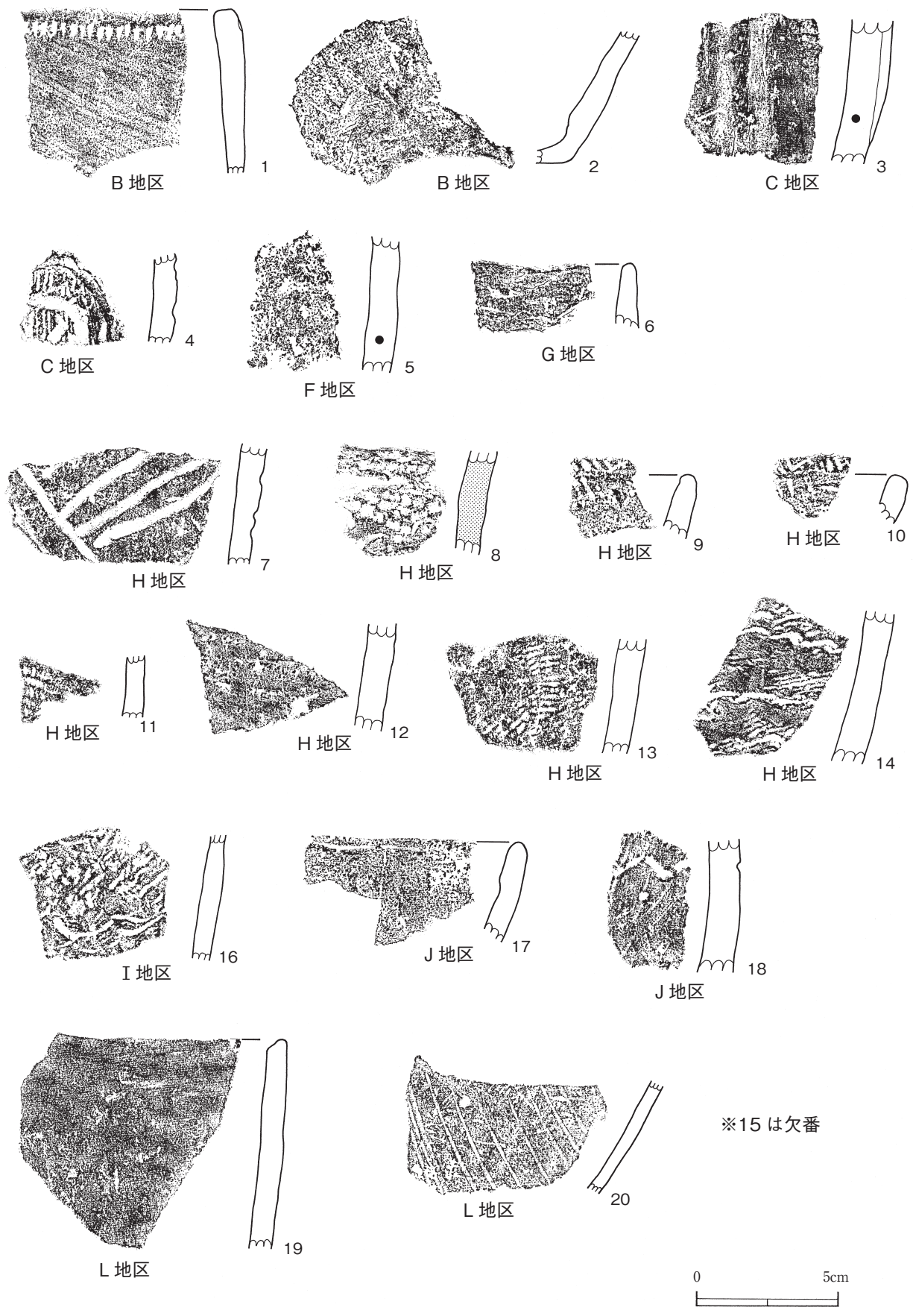
19～25・27・28は阿玉台式土器。19～21は阿玉台I a式で、20・21は同一個体。口縁部文様帯は隆線で区画文を構成し、区画内には単列の角押文を沿わせる。22～24・27・28は阿玉台I b式。22は耳状の把手(台部の可能性も否定できない)で、23は未発達な扇状把手。27・28は胴部片。25は複列の有節線文を描線として、山形文を横位に連携施文するもので、阿玉台II式に比定されるものである。

26は勝坂式土器。ごく希少な台付土器の台部で、裾部に太沈線を廻らし、円形の透し孔を穿つ。

29は堀之内式土器か。深鉢の胴下半で、縦位の細かなミガキを施している。

30は安行1式土器。紐線文系粗製土器の胴下半で、斜方向(右下がり)の条線を施す。

31は磨石転用の敲石。欠損面を敲打で潰しており、敲石としての使用面は一端のみである。表裏面の使用面は、磨石として使われていた頃のもの。砂岩製。



第12図 B・C・G・H・I・J・L地区出土遺物

B 地区（第12図1・2）

1は安行1式の紐線文系粗製土器。紐線の貼付はなく、右下がりの条線を施してから、口縁下に連続刻文帯を施文している。

2は胴下半～底部の破片であるが、器面調整痕（ケズリ後、部分的にミガキ）のみ。あるいは、晩期安行式土器群に伴う粗製土器になる可能性がある。

他に五領ヶ台式1点、阿玉台式3点、勝坂式1点、加曾利E式2点出土。

C 地区（第12図3・4）

3・4とも阿玉台式土器の胴部片。3は縦位の隆線を垂下しており、底部に比較的近い部位である。4は縦位の条線を地文に、沈線で意匠を描くもので、阿玉台IV式に比定される。

他に阿玉台式6点出土。

F 地区（第12図5）

5は阿玉台式土器の胴部片で、調整痕のみ。胎土は「雲母混入型」。

他に阿玉台式2点、加曾利E式1点出土。

G 地区（第12図6）

6は後期安行式に伴う粗製土器か。平縁で、器内外面とも調整痕のみ。

この地区は、これが唯一の出土遺物。

H 地区（第12図7～14）

7は田戸下層式土器。太沈線でタスキ掛け状の意匠を描くもの。

8は黒浜式土器で、地文縄文部分の胴部片である。胎土に繊維を含む。

9～12は前期末葉か。13・14は前期末葉～中期初頭の縄文系粗製土器。13は1段L、14は1段Lで結節縄文を構成する。

他に浮島・興津式1点、前期末葉～中期初頭7点、阿玉台式3点、型式不明4点が出土。

I 地区（第12図16）

16は前期末葉～中期初頭の縄文系粗製土器。附加条縄文で結節縄文を構成するものである。

この地区は、これが唯一の出土遺物。

J 地区（第12図17・18）

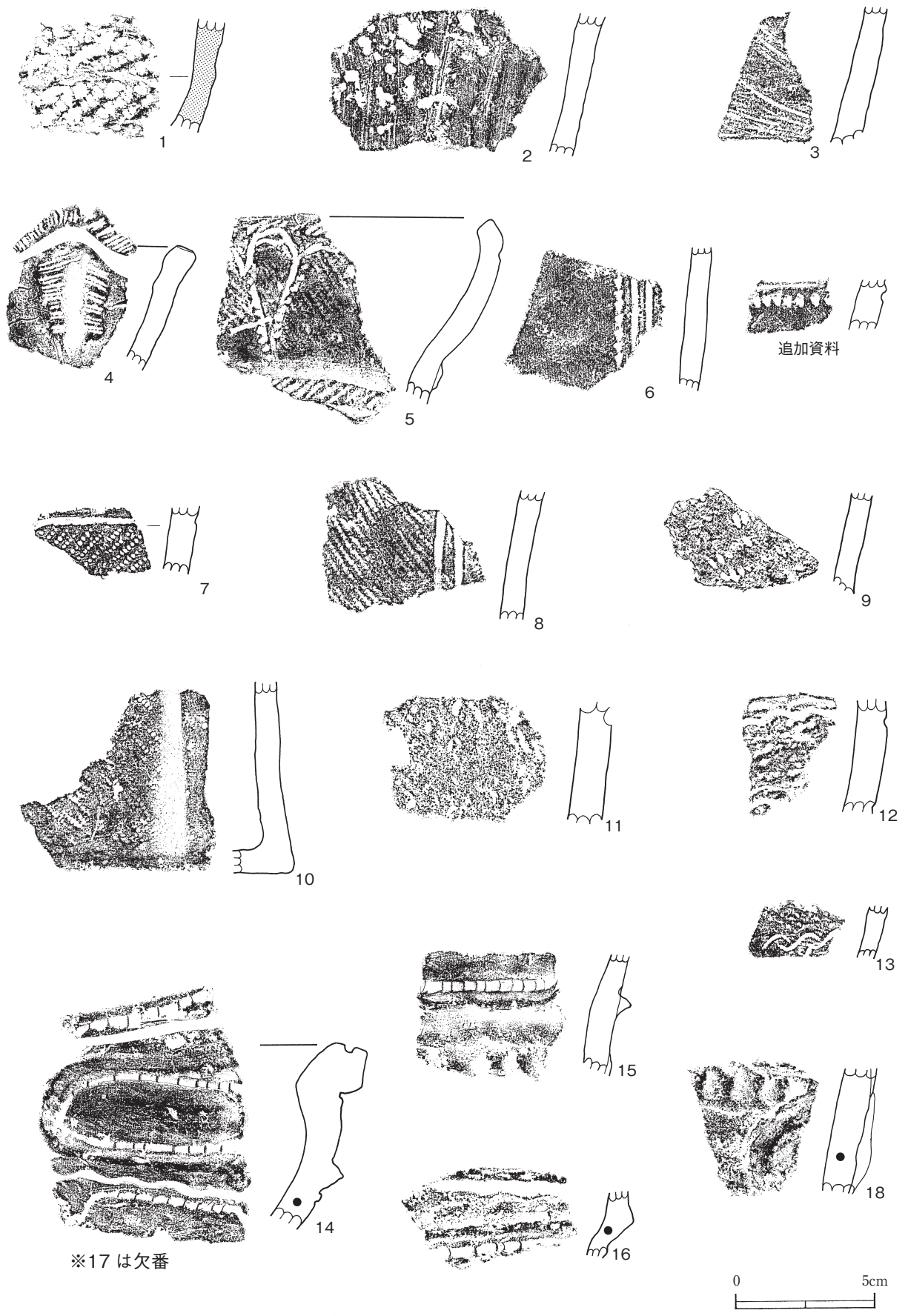
17は平縁で、器面調整痕のみ。前期後半になるか。18は胎土に石英・雲母粒を含み、沈線で山形状の意匠を描く。五領ヶ台式か（あるいは阿玉台式）。

他に型式不明2点出土。

L 地区（第12図19・20）

19・20とも晩期安行式土器に伴う粗製土器。19は平縁で、口唇部形態は内削ぎ状を呈する。ケズリ→ミガキの調整痕のみを施す。20は右下がりの条線を施した胴部片である。

他に晩期安行式9点、型式不明4点出土。



※17 は欠番

第13図 表採遺物 (1)

(4) 表採遺物 (第13図・第14図)

採取された遺物の内訳は、図示したものを含めると、下記の通りである。

旧石器時代 旧石器 1点 (剥片)

縄文時代 縄文式土器64点 (黒浜式 1点, 浮島・興津式 6点, 前期末葉～中期初頭10点, 五領ヶ台式 10点, 阿玉台式20点, 勝坂式 1点, 中期大木式 1点, 後期安行式 7点, 型式不明 8点)

時期不明 砥石 1点

奈良・平安時代ないしそれ以降 土師器? 1点

34(写真図版) は剥片。表側に一部原礫面を残す。下端から側縁にかけて微細な剥離が認められる。

1は黒浜式土器。地文縄文を施した胴部片。使用した原体は、前々段反撚か。

2・3は浮島・興津式。2は胴部下半の破片で、ケズリによる器面調整痕のみ。器内外面とも剥落が目立つもの。3は条線のように細い沈線を、密接して施文している。

4～10・追加資料は五領ヶ台式土器。4は小波状縁。波頂部から「逆U字状」の隆線を貼付し、口唇部及び隆線上に細密沈線状の細かなキザミを施す。5は平縁。キャリパー形の器形と思われ、口唇部形態は内削ぎ状を呈する。地文縄文2段LRを施文後、単位文の「逆U字状文」を沈線で描き、連続刺突文を沿わせ、この単位文から波状沈線を引く。頸部には横位の隆線を貼付し、その上に縄文を施す。6～9・追加資料は胴部片。6は2本の懸垂文を引き、連続刺突文を沿わせる。追加資料は横位の連続刺突文を施す。7・8は地文縄文2段LRを施文後、7は押引文、8は2本の懸垂文を引いたものである。9は地文縄文部分で、2段LRを施す。10は胴下半～底部片で、底部は外面にやや張り出す。地文縄文2段LRを施文後、隆線を垂下し、その両脇にナゾリを加える。10は胎土に雲母微細粒が目立つ。

11～13は前期末葉～中期初頭の縄文系粗製土器。11は地文縄文のみ。13は無節縄文による結節縄文。

14～24は阿玉台式土器。14は波状縁。口縁は肥厚し、幅広の内稜を有する。口縁部文様帯は、隆線で楕円形区画文を描き、区画内に単列の有節線を沿わせる。口唇上には一列の角押文を施す。15・16は頸部ないし口辺部。ともに隆線を貼付して区画文を構成し、区画内に単列の角押文を沿わせるもの。18・20～23は胴部片。18はひだ状の装飾を施してから、蛇行隆線を垂下する。20はほぼ同様であるが、隆線は直線な点が異なる。21は製作時点での輪積みの段毎に、ひだ状の装飾を加えているものである。22は隆線を垂下し、隆線脇に角押文を沿わせるだけでなく、横位の波状沈線を充填する。23は隆線を垂下し、隆線脇に押引文を沿わせる他、横位に爪形状の刺突を充填するもの。

これらの位置づけは、15・21が阿玉台I a式、それ以外は阿玉台I b式に比定される資料である。

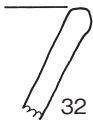
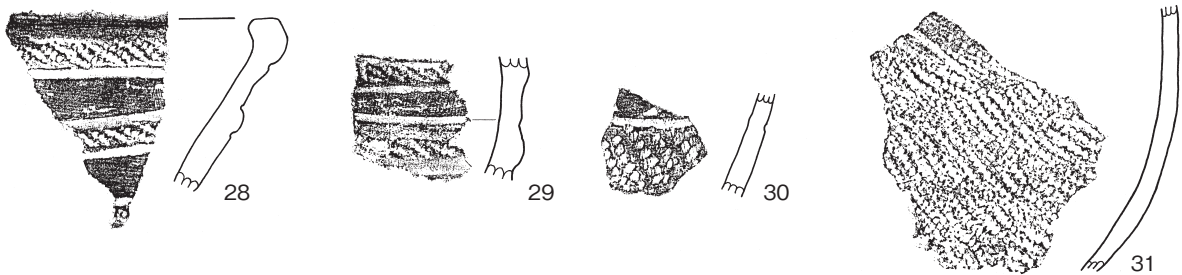
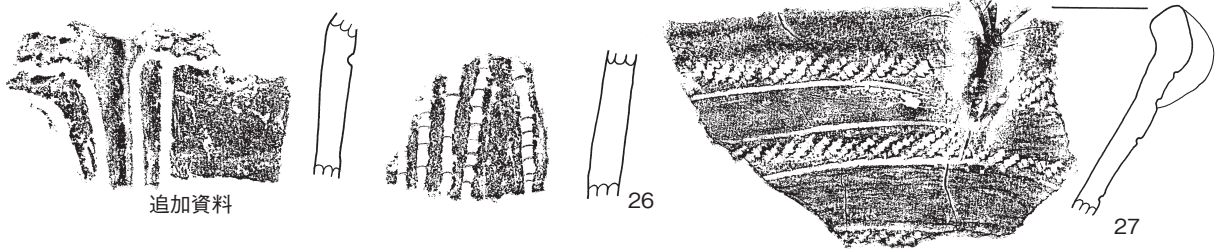
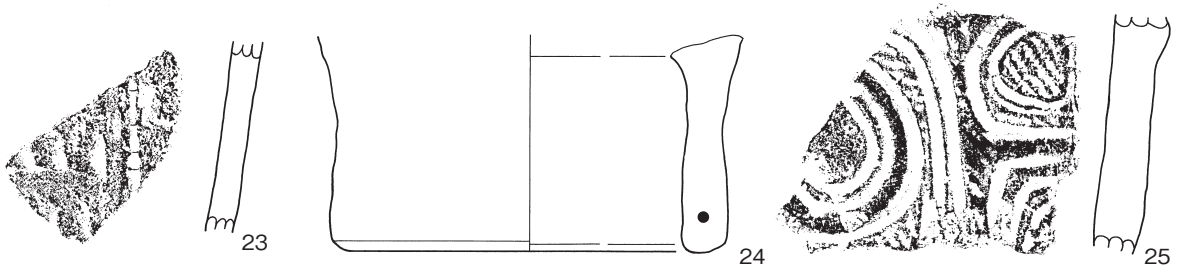
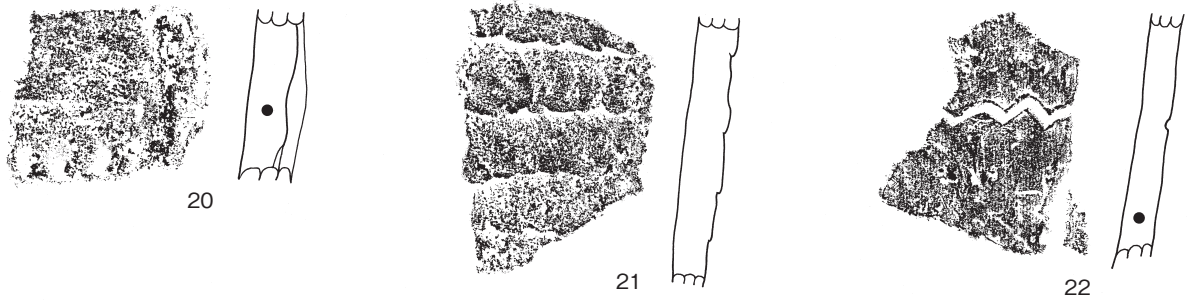
24はごく希少な台付土器の台部。本体と台部の接合部で欠損する。低高台となるものであるが、裾部の端は欠損後ていねいに磨って平らに仕上げている。器内外面とも調整痕のみで、素文である。

25は大木8 a式土器。隆線を貼付して区画文を構成してから、地文として縄文2段LRを施文し、しかる後に区画内に意匠を充填して、さらに装飾を加えている。拓本では、中央の隆線を境にして、左は大区画、右は小区画を重畳させる。大区画には隆線で円圏ないし同心円状の意匠を描き、外側一条、内側二条の結節沈線を沿わせている。小区画は、二条の結節沈線を沿わせる。

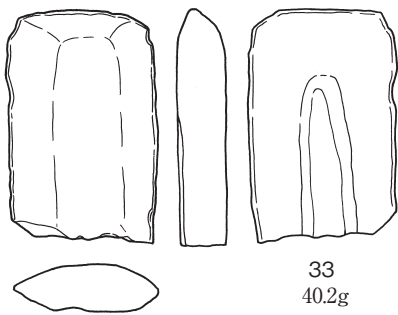
本例は、隆線上に縄文が施される点や、施文工程などは阿玉台式土器と同様であることから、少なくとも、東北地方からの搬入品ではない可能性が高い。

26・追加資料は勝坂式土器で、同一個体。隆線による区画文の中に多条化した結節沈線を充填する。

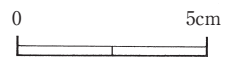
27～31は安行1式土器。27は隆起帯縄文系精製土器で、平縁の深鉢。口縁は外反して立ち上がり、三段以上の隆起帯縄文を施し、口縁直下に二段をまたぐ形で貼瘤を有する。28・29は同一個体。31は胴部文様帯の破片で、磨消縄文による「互連弧充填縄文」が施されていたものと思われる。



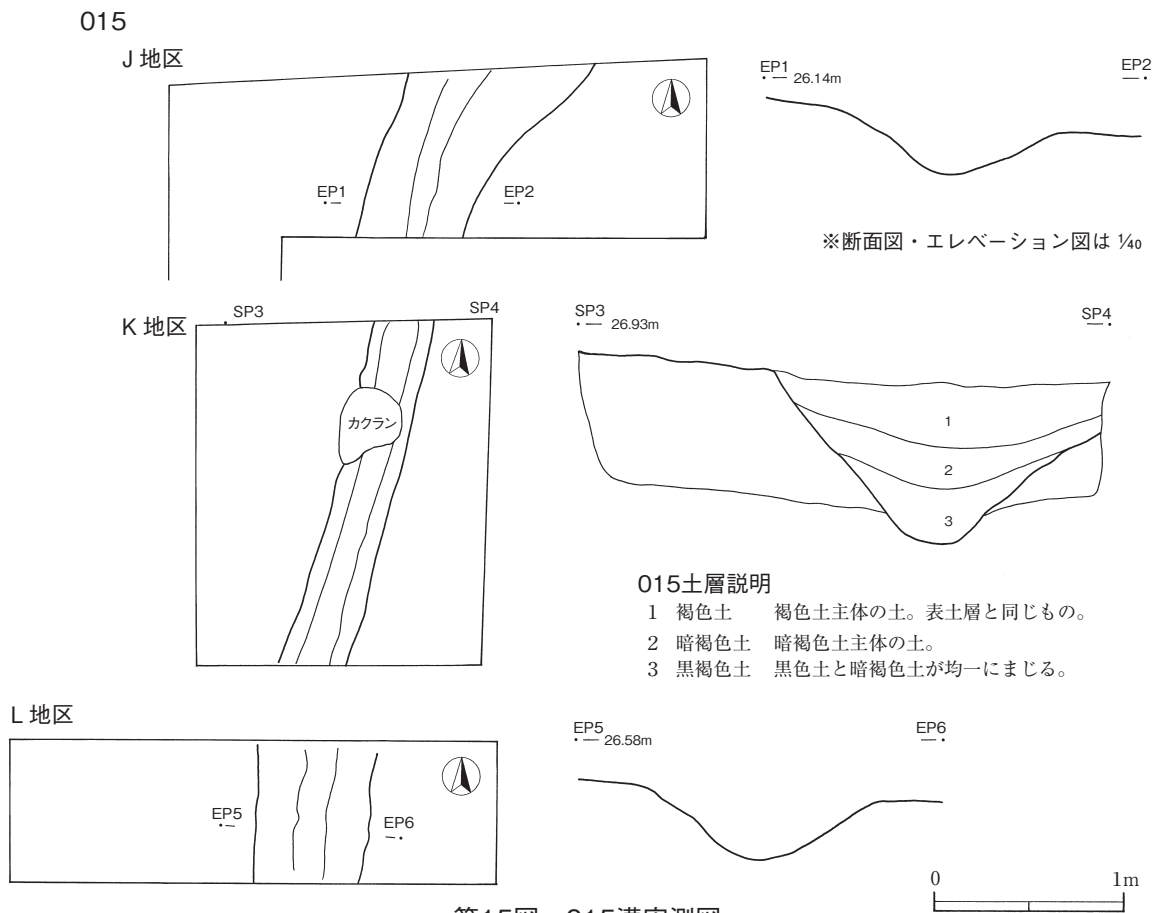
※19は欠番



33
40.2g



第14図 表採遺物 (2)



第15図 015溝実測図

2. 縄文時代以降

今回の調査で縄文時代以降と認定されたものは、溝1条のみである。時期を判断すべき属性に乏しく、かつ出土遺物も皆無であった。中・近世の所産である可能性が高いと考えているが、厳密に言うならば、「時期不明」とすべきものである。本調査時の遺構番号は通しでふったため、015のままとした。

表採遺物の第14図32は、土師器の口縁部か。やや厚手のロクロ整形で、近世あたり、あるいはさらに下る時期のもの可能性がある。

同図33は砥石で、下端を欠損する。扁平な板状で、横断面形はレンズ形、先端部ないし頭部は鈍い蛤刃状を呈する。表ないし裏面の中央部に浅い溝状のくぼみが有る。砂岩製。

本例は単独で採取されたため、「時期不明」扱いにした。(註1)

註1 その後この遺物は後期～晩期安行式に伴う特徴的な砥石であることが判明した。

(1) 溝

015遺構(溝)(第 図)

位置 J地区・K地区・L地区。重複関係 単独。形状 略直線状を呈する。J地区では幅員が増しており、深度自体は浅くなる。壁・底面 壁はごくゆるやかな「V字状」を呈する。J地区での横断面形は、「U字状」に近いものとなる。規模 総延長7.03m(J地区1.83m, K地区3.75m, L地区1.45m), 幅J地区1.95m, K地区0.70m, L地区1.26m, 深さJ地区0.72m, K地区0.85m, L地区0.42m。覆土 3層に分層できた。1・2層は暗褐色土系で、1層は表土に近い内容となっており、最下層は黒褐色土系。全て自然堆積である。遺物 L地区の覆土から縄文式土器片15点が出土したが、本跡に伴うものではない。本章第1節第3項において、「L地区」出土遺物として掲載した。

第3章 成果と課題

今回の調査の成果として、縄文時代の陥穴群の検出の他、出土土器にも見るべきものがあった。以下に、整理作業によって明らかになった点の幾つかを、記すことにしたい。

1. 縄文時代の陥穴

001・002・003・004・010B・011・012A・014土坑の8基が該当する。

これらは、平面形状・断面形状及び覆土の観察などを踏まえ、陥穴と認定したものである。

陥穴は、1973年に神奈川県横浜市霧ヶ丘遺跡において、正式に認定されて以来、この30数年で調査例は激増し、全国規模で集計した場合の総検出数は、「十万の単位」に達していると思われる。この間に、陥穴に関する研究論文も数多発表されており、縄文時代の遺構の中では、堅穴住居跡ほどではないにせよ、研究が進んでいる分野のひとつである、と言っても過言ではない。

他方で、時期決定が可能な資料はいまだに少なく、様々な形態の陥穴の変遷や、各形態の系統・系譜関係及び地域性などの解明については、なお不明な点が多いのである。

今回は、マイクロエリアにおける様相の把握を基本方針とし、本遺跡検出の陥穴の形態分類を行いたい。使い古した、陳腐な方法かも知れないが、こうした遺跡・遺構の知見の積み重ねが、論考の下地になるという点は、考古学の基本そのものであると思っている。

形態分類の視点は、底部平面形を重視し、これに底部施設の有無という属性を加味している。

I類・・・底部平面形は長方形で、底部施設を有さないもの。さらに数種に分類される。

a種・・・底部の形態が方形に近いもの。

b種・・・底部の長辺と短辺の比が約2:1になるもの。

II類・・・底部平面形は隅丸方形で、底部施設を有するもの。さらに数種に分類される。

a種・・・底部施設が円形ピット1本のもの。

b種・・・底部施設が方形ピット1本のもの。

III類・・・底部平面形は長方形で、底部施設を有するもの。

各類に該当する遺構は、下記のとおりである。

I類a種・・・003土坑・012A土坑

I類b種・・・001土坑・011土坑・014土坑

II類a種・・・004土坑

II類b種・・・002土坑

III類・・・010B土坑

今回は、方形を基調とした例が主体で、いわゆる「霧ヶ丘E型」のような、溝状で深いものは検出されなかった。また、002土坑から、阿玉台I a式土器が、010B土坑から石鏃が出土した。ただし、覆土中の場合、埋没途上での包含層からの逆流も考慮する必要があり、時期決定資料と即断はできない。

注目すべきは、014土坑の北壁直下の、9層上面において検出された硬化面である。これは、硬化面直上の北壁に崩落が見られる点などから、落ちた獲物を引き上げるなどの作業を行った際にできたものと思われる。陥穴内部での人間の行動が窺われるという点で、今後とも類例に注意を払ってゆきたい。

2. 台付土器の評価

今回の出土土器から、縄文中期中葉に位置づけられる、出土例が稀有な台付土器の台部が2点抽出できた。以下は、台付土器という、「器形」に関わる検討を行うものである。

第16図は、県内の中期中葉の類例を、ごくダイジェスト的に集めてみた。

本遺跡は、1が裾部に一条の沈線を廻らせ、透し孔（おそらく円形）を有する足高気味の高台のもので、4は器面調整痕のみの素文で、低高台気味のものである。これらは、胎土・焼成などから検討すると、前者が勝坂系土器、後者は阿玉台式土器に比定される。

前者の類例は、2の松戸市通源寺貝塚・3の同市大橋馬乗場遺跡例に明らかなように、勝坂式ないし勝坂系土器に多くみられる。形のわかる例を見る限り、カップ形土器や小形の深鉢形土器などに足高気味の台部が付けられている。これらは、円形の透し孔を有するという属性もまた、共通するのである。

そして、その分布は、6の船橋市高根木戸遺跡例（勝坂式土器）を含めると、下総台地の西部に多いことがわかる。この地域は、阿玉台式土器文化圏の中では、組成に勝坂式土器の比率が高いのである。

後者の類例は、松戸市根之神台遺跡しか検索が間に合わなかったが、阿玉台式土器である。報告書の挿図では、誤植のため上下が逆で、台付土器と気づきにくいという憾みがあるが、土器の解説は「台付土器の台部」と明記している。本遺跡とも台の上が欠損しており、どの器形であったかはわからない。

第17図に明らかなように、台付土器の台部の形状は、少なくとも足高気味の高台と、低高台に大きく二分できるようである。そして、前者では円形の透し孔を有し、後者では調整痕のみの素文となる。

これらから、本遺跡出土例の第16図1・4は、曲がりなりに、台付土器における台部の形状の二者を、ある程度は忠実に表現していたことになる。

3. 「台付の土器を作る」ということ

本遺跡の低高台気味の台付土器に関しては、勝坂式土器の影響で文化複合が起こり、阿玉台式土器を製作していた集団の中で、「台付の土器を作る」という風習が誕生したものと、現状では捉えておきたい。

それでは、台付土器は勝坂式土器を製作していた集団（関東南西部から甲信地域）の中で、果たして生み出された器種なのであろうか。この問題を少しく検討してみる。以下では、地域間の問題や伝播なども扱うが、土器そのものの型式学的手続きや裏づけは、浅薄になっており、御寛恕を乞いたい。

第17図1～5は中期中葉の北陸（富山・石川）の台付土器を集めたものである。

該当地域における中期中葉の土器群は、上山田式・古府式土器で、小島俊彰氏の解説を引用すると、『端部で渦を巻く基隆線を中心にして半隆起線を引き回してつけた文様が主文様』を特徴とする。

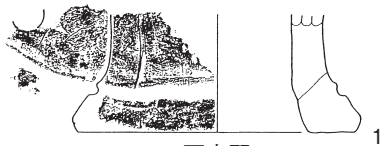
この地域では、図に載せなかったものを含め、台付土器は器種構成の中に安定して存在するのである。

しかも、台部の形状の二者が存在するだけでなく、時期的に複数の土器型式にまたがっており、ある程度の変遷を追うことができる。少なくとも、盛んに製作していた地域である、と言えそうである。

勝坂式土器と上山田式・古府式土器に見られる台付土器の発生が、「一元論」・「多元論」のいずれかを単純に判断することはできない。ただし、製作量の多寡や、台付土器の命ともいえる台部分の形状が、遠隔地同士の比較でも概ね同一である点などから見て、北陸起源の「一元論」的考え方は説得力がある。

反面、土器自体は、文様及びその描出法などがかなり異なっており、その点で器形の問題は難しい。結局、土器を媒体とする情報は、「文様」と「器形」では、伝わり方や変容の仕方が異なるわけである。

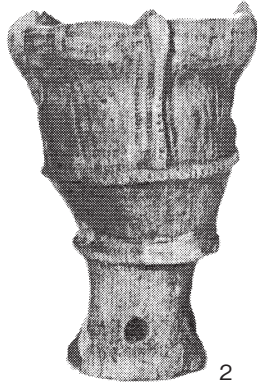
整理すると、北陸で生み出された「台付の土器を作る」という情報は、地域間交流を背景に、山越えで中部高地へもたらされ、勝坂式土器を製作していた集団に受容された。そして、関東山地を越え、さらに東京湾東岸の阿玉台式土器を製作していた集団へと、情報が伝わっていったものと解釈されよう。



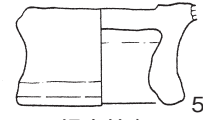
西内野



西内野



通源寺



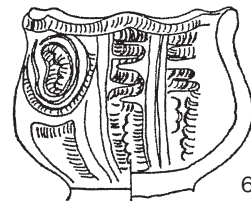
根之神台

透孔を有さないもの
(胎土・焼減から見て阿玉台式)



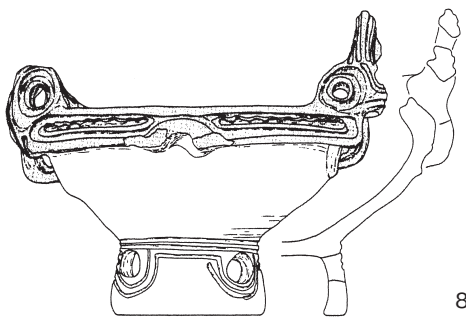
大橋馬乗場

透し孔を有するもの
(勝板系)

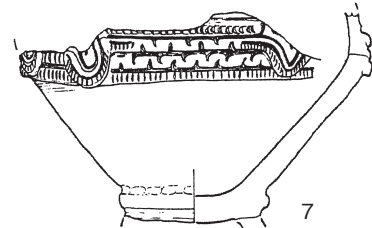


高根木戸

(台部の形状不明)



東長山野 (大木式の影響がある)



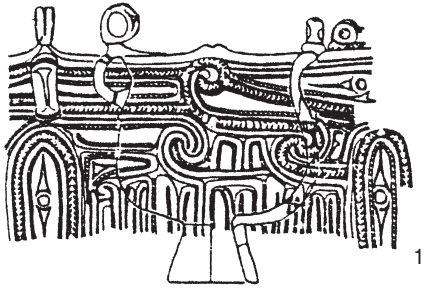
子和清水

※7・8は阿玉台式末～
加曾利E式初頭の時期

(縮尺不同)

第16図 千葉県における縄文中期中葉の台付土器

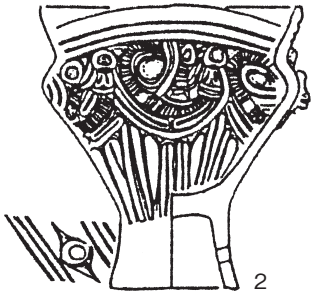
足高気味の高台のもの



浦山寺蔵 (富山)

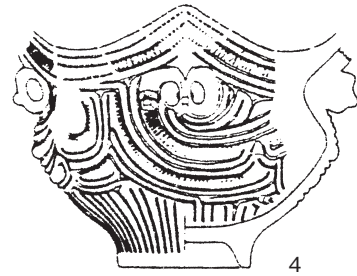
※1→2→3で新しくなる
 ※4→5で新しくなる
 ※2・4は同段階、3・5は概ね同段階
 ※1～3のような器形を北陸の研究者は「高台付鉢」と呼ぶ

低高台のもの

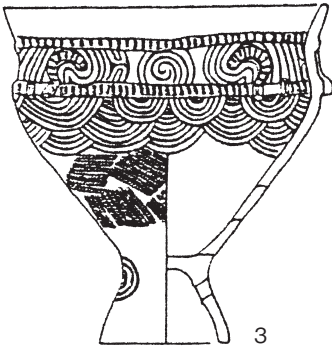


浦山寺蔵 (富山)

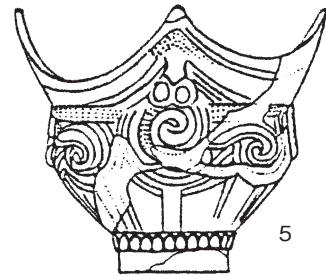
1～5
 北 陸
 (上山田・天神山系)



筋生 (石川)



二ツ塚 (富山)



古府 (石川)



曾利 (長野)

6・7
 中部高地
 (勝板系)



広原 (長野)

(縮尺不同)

第17図 台付土器における二者 (縮尺不同)

4. 派生する問題

台付土器に関して、派生する問題を幾つか取り上げたい。

第16図7・8は、時期的には阿玉台Ⅳ式～加曾利ⅤⅠ式期に相当し、「中峠式土器」を構成する主要な類型である「中峠0地点型深鉢」と併行するものである。本遺跡は、1が勝坂Ⅲ式（あるいはⅣ式か）、2は阿玉台Ⅰb式～Ⅱ式に比定されるため、それらよりはやや後出の資料となる。

8の把手を観察すると、大木8a式土器の強い影響が認められる。この点も踏まえると、派生する問題として、大木系の土器に見られる台付土器の意味が挙げられ、細かく見れば、中期中葉～後葉にかけてという、時間差も検討の対象となろう。残念ながら、今回はこの問題に対する答えは用意できなかった。ただ、大木8a式土器の文様描出技法の中に少数認められる、「半隆起線」の系譜を辿ると、やはり北陸に行き着くので、台付土器の問題と無関係ではない可能性がある、とだけ記しておく。

5. その他の縄文式土器

まず、2点抽出できた田戸下層式土器は、市内でもいまだ出土数が少量なだけに、貴重である。

黒浜式・浮島式・興津式土器は、出土したとはいえ、比較的少量にとどまった。前期末葉～中期中葉の縄文系粗製土器は、ややまとまりがある。胴部片が多く、細別が困難なため、大枠で括っている。

五領ヶ台式土器は、いわゆる八辺式Ⅱ期～Ⅳ期の資料で、出土数はⅣ期が多い。

阿玉台式土器は、今回の主体である。阿玉台Ⅰa式・Ⅰb式・Ⅱ式・Ⅳ式が見られ、最も出土数が多いのはⅠb式で、胎土的には「雲母混入型」でも、雲母が比較的少量なのが本遺跡の特徴といえる。

1点ながら、大木8a式土器（阿玉台Ⅳ式併行）が抽出できた。無論、本場の東北地方のものではなく、北関東（栃木県）ないしは、東関東（茨城県）地域で製作された土器と思われる。属性を検討すると、隆線による基幹文様に沿わせた結節沈線（有節沈線）などは、福島県南部の「七郎内第Ⅱ群土器」との脈絡を示唆するものがある。今後市内での類例の増加を切望する。

安行Ⅰ式土器は、精製・粗製土器とも出土しており、帯縄文系精製平縁深鉢の大破片が抽出でき、今回は晩期安行式土器の粗製土器も出土した。遺跡地名表を鵜呑みにはできないが、参考にすると、吉橋支台には後期安行式土器を出す遺跡が比較的多く、本遺跡の内容はそれを間接的に証明するものである。

参考文献（主として第16・17図の出典文献）

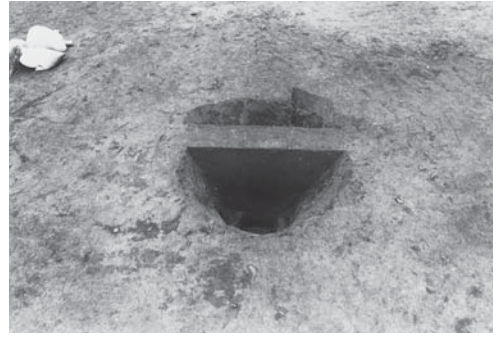
- 安孫子昭二 1990 「勝坂式土器様式」『縄文土器大観』2 講談社 317-324頁より
谷口康浩編 「勝坂式土器様式変遷模式図」
- 今村啓爾 1973 「土壙の分類」『霧が丘』霧が丘遺跡調査団 140-143頁
- 岩崎卓也ほか 1985 「子和清水貝塚 遺物図版編2」松戸市教育委員会
- 上守秀明ほか 1990 「根之神台・中内遺跡」『松戸市野見塚遺跡・前原Ⅰ遺跡・根之神台遺跡・中内遺跡・中峠遺跡・新橋台Ⅰ遺跡・串崎神殿東里所在野馬除土手』財団法人千葉県文化財センター
- 小島俊彰 1990 「上山田・天神山式土器様式」『縄文土器大観』3 講談社 295-298頁
- 下総考古学研究会 2004 『下総考古学18 特集 房総半島における勝坂式土器の研究』
- 松本 茂 1982 「七郎内C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告』X 福島県教育委員会
- 道澤 明ほか 1990 『東長山野・北長山野遺跡』北長山野遺跡調査会
- 湯浅喜代治・塚田 光 1973 「千葉県通源寺貝塚採集の中期縄文土器」『考古学雑誌』59巻1号
日本考古学会 57-61頁

写 真 图 版

図版 1



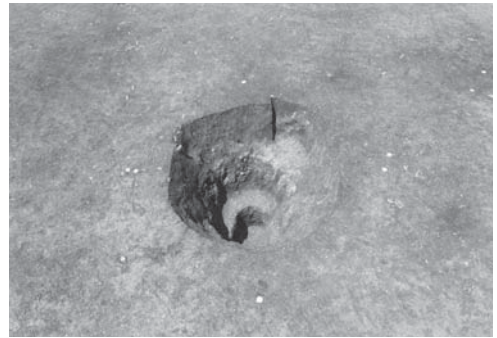
確認調査トレンチ (1)



002 土坑セクション



確認調査トレンチ (2)



002 土坑完掘



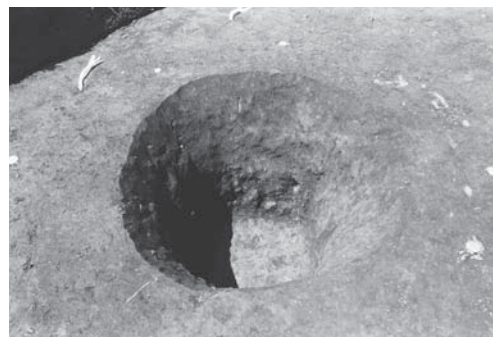
001 土坑セクション



003 土坑セクション



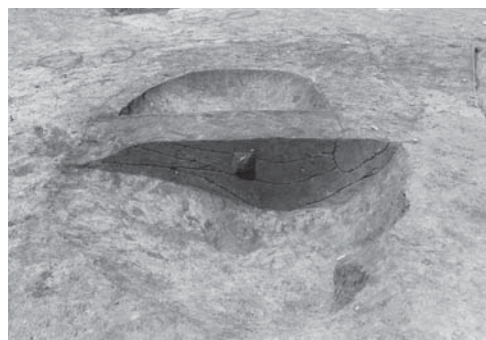
001 土坑完掘



003 土坑完掘



004 土坑セクション



006 土坑セクション



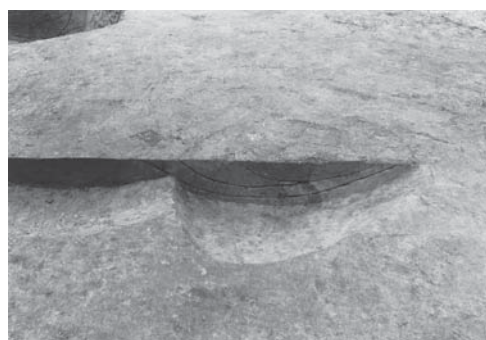
004 土坑完掘



006 土坑完掘



005 土坑セクション



007 土坑セクション



005 土坑完掘



007 土坑完掘

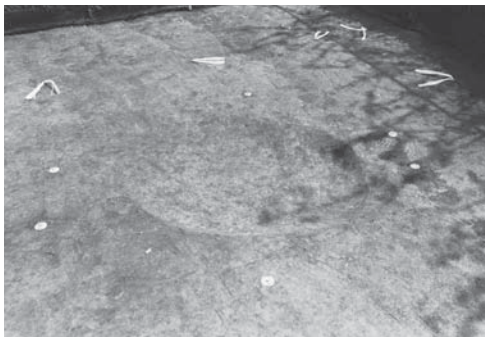
図版3



008 土坑セクション



010 土坑セクション



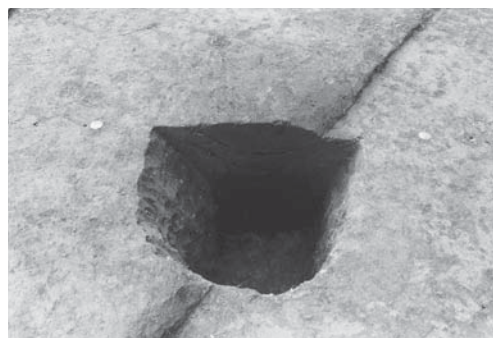
008 土坑完掘



010 土坑完掘



009 土坑セクション



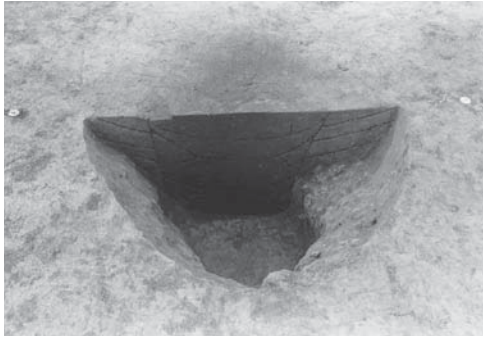
011 土坑セクション



009 土坑完掘



011 土坑完掘



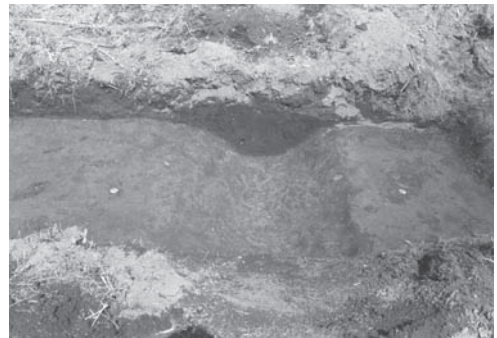
012 土坑セクション



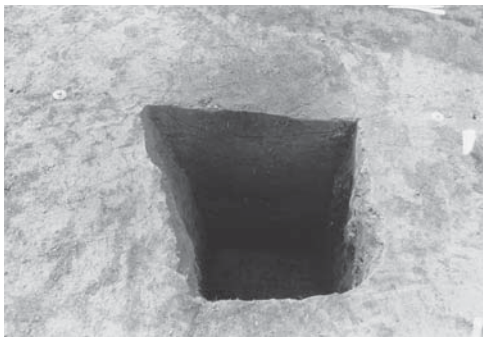
015 溝(1)



012 土坑完掘



015 溝(2)



014 土坑セクション



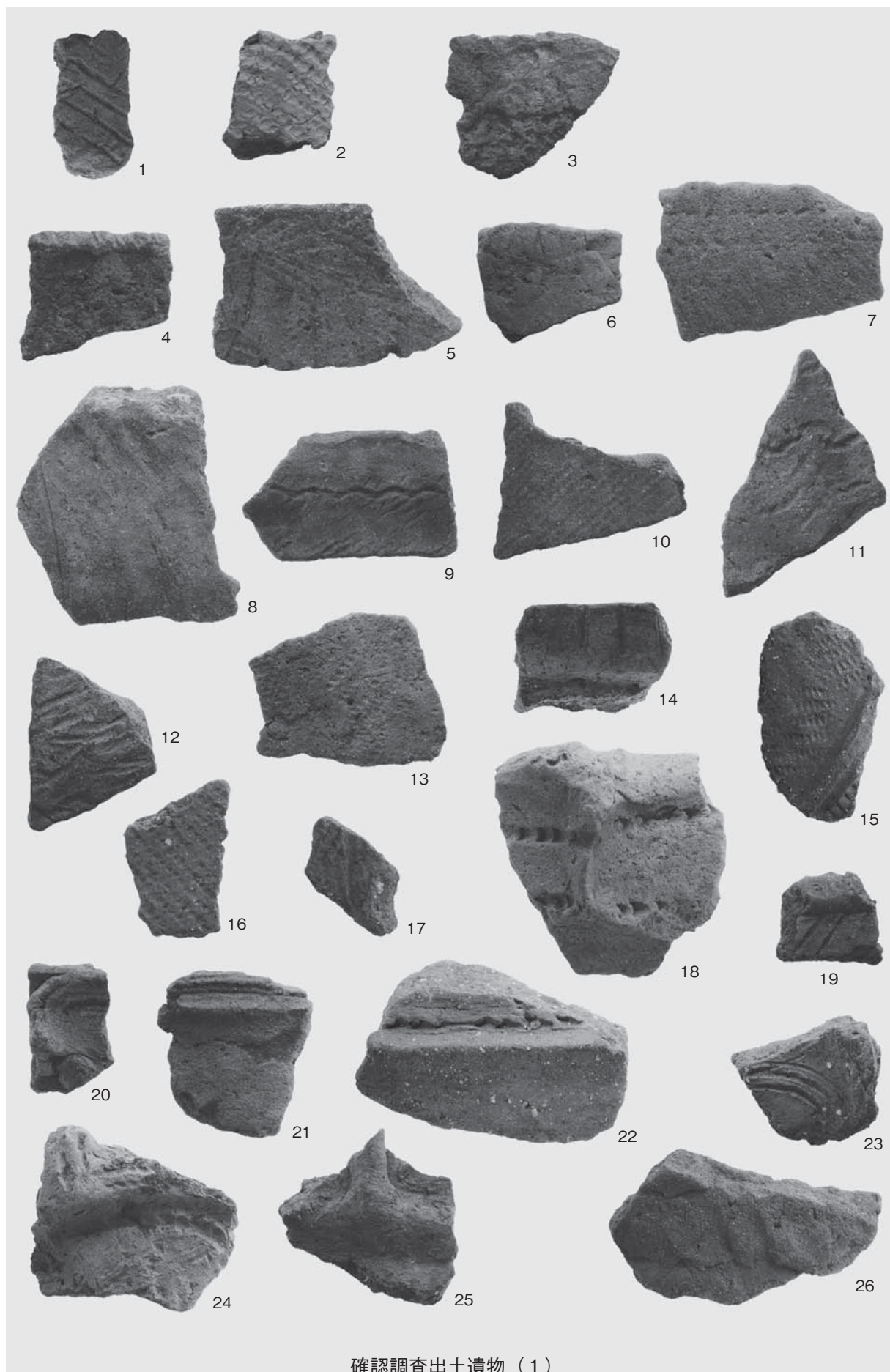
015 溝(3)



014 土坑完掘



調査終了状況



確認調査出土遺物 (1)



27



28



29



30



31



32



33

確認調査出土遺物 (2)



002 土抗



003 土抗

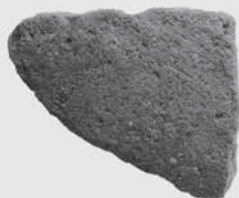


010 土抗

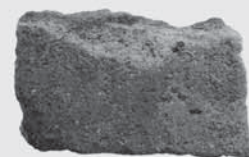
陥穴出土遺物



006 土抗



006 土抗



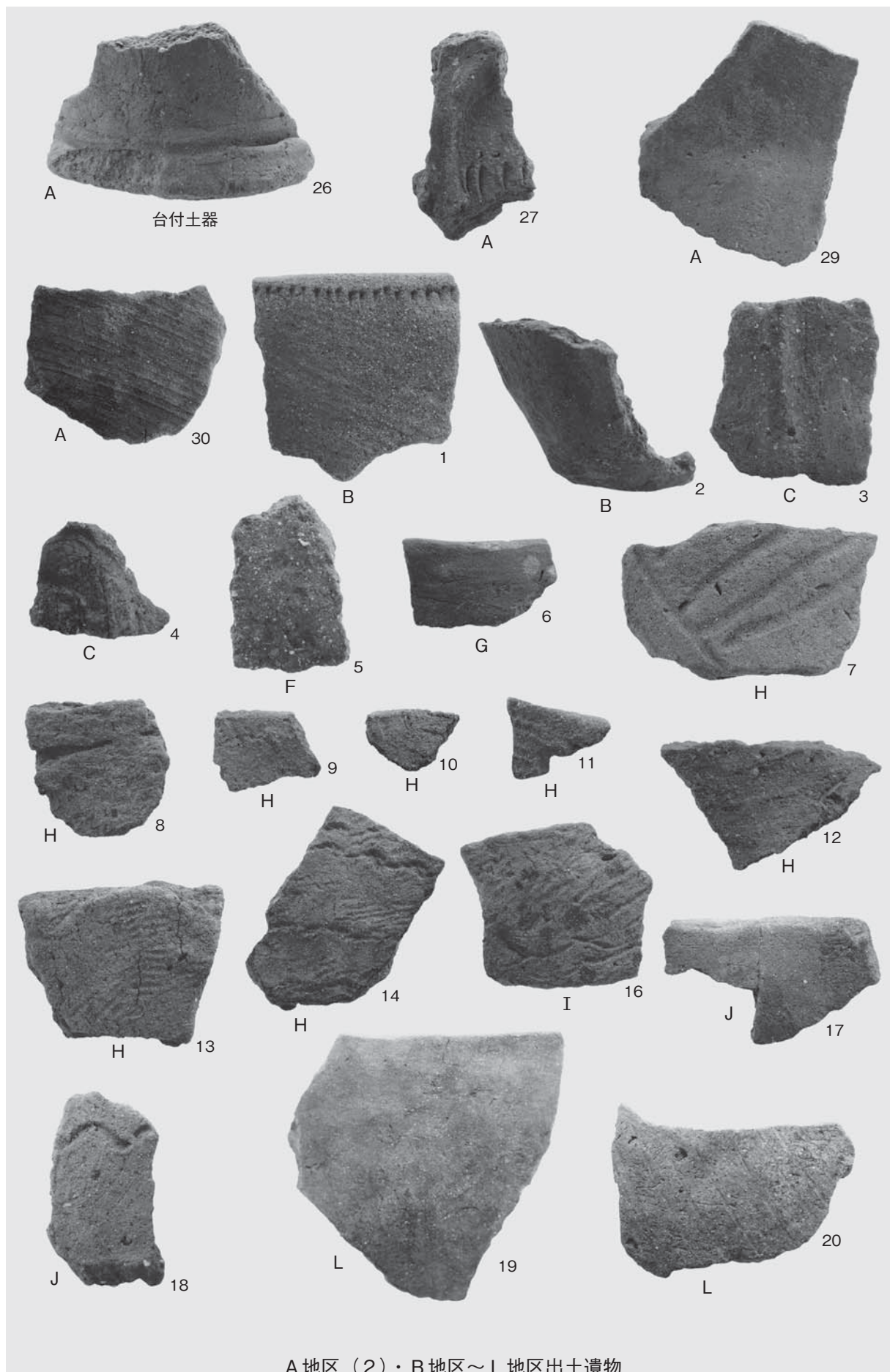
009 土抗

土抗出土遺物

图版 7

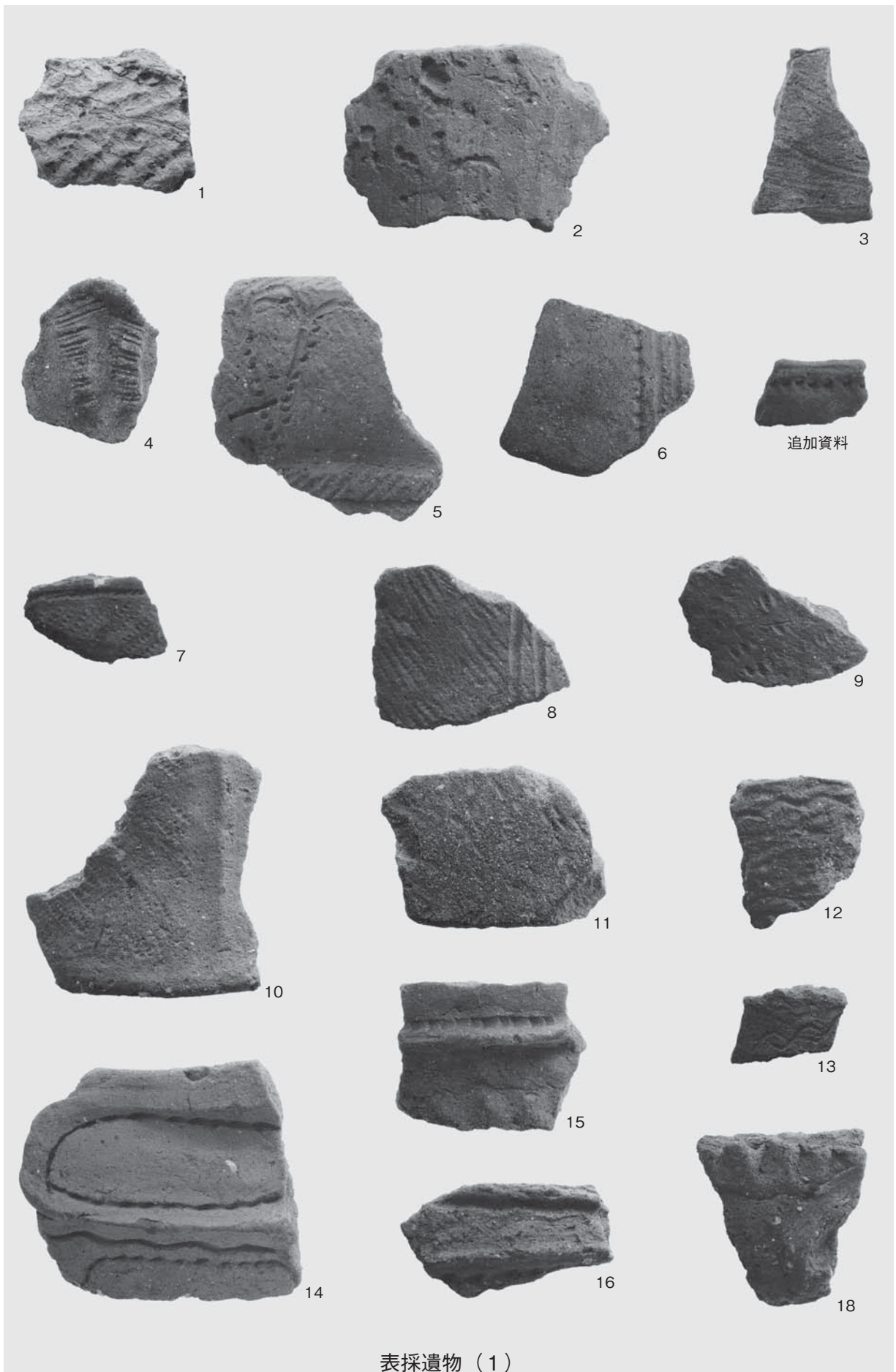


A地区出土遺物(1)

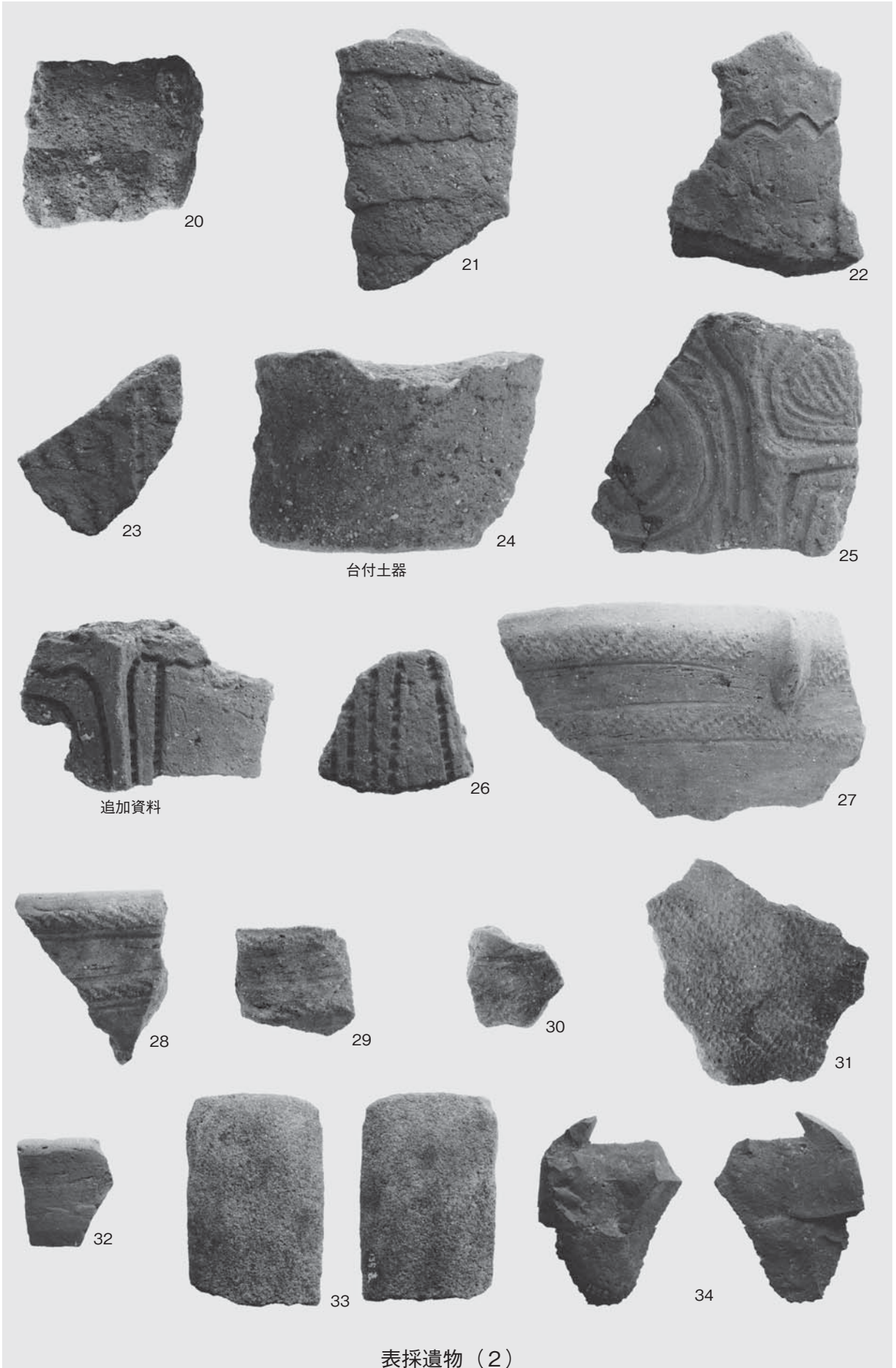


台付土器

A地区(2)・B地区～L地区出土遺物



表採遺物 (1)



表採遺物 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよしにしうちのいせき							
書名	千葉県八千代市西内野遺跡地点							
副書名	物流センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	森 竜哉 中野修秀							
編集機関	八千代市遺跡調査会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 (047(483)1151代表							
発行年月日	2007年11月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしうちの 西内野遺跡	やちよしよしはしあざ しうちの 八千代市吉橋字 西内野1824-1他	12221	135	35度 44分 13秒	140度 4分 48秒	19990406 ～ 19990506	219㎡	物流センター 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西内野遺跡	狩猟場 集落跡	縄文時代 中・近世	陥穴 8 基 土坑 6 基 溝 1 条		縄文土器（黒浜式，阿玉台式， 勝坂式，安行1式） 石器（石鏃，敲石，磨石）		縄文時代の 狩猟場	

千葉県八千代市 西内野遺跡発掘調査報告書 2007(平成19年)

印刷日 2007年11月8日
 発行日 2007年11月15日
 編 集 八千代市遺跡調査会
 〒276-0045 八千代市大和田138-2
 TEL 047(483)1151
 発 行 新京成電鉄株式会社
